

# 石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

— 栃畑谷地区 字甚光院の石造物調査 —

附編

【大谷地区 高橋家裏の石造物】

【清水谷地区 本法寺跡—銀山町地役人 門脇家墓地—】

【下河原地区 下河原天満宮跡の石造物】



平成26(2014)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

## 序

石見銀山遺跡は鉱山遺跡としては、アジアで初めて世界遺産登録された遺跡であります。また、平成22年度は充実した保護を目指すため資産の範囲を拡大しました。

鉱山操業活動が激減して久しい日本においては、鉱山そのものが忘れ去られようとしていましたが、石見銀山の世界遺産登録によって、現在は国内各地の鉱山遺跡にも光が当てられつつあります。

この世界遺産登録に向けて島根県と大田市では、平成9年から発掘調査や文献調査など様々な調査に取り組み、登録後においても引き続きその価値を高めるために調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初より取り組んでおり、これまでに銀山400年の歴史の姿を次々とかつ生々しく明らかにしてきました。

本書は、平成25年度に石造物悉皆調査を実施した栃畑谷地区字甚光院の成果を中心に、報告いたします。

栃畑谷地区字甚光院の調査では、16世紀末～17世紀中頃に及ぶ石塔群と同所に18世紀以降勧請されたとみられる愛宕社に関連する石造物を確認することができました。このように墓地の成立、展開、衰退とその後の神社の成立など時系列的な土地利用の変遷状況を確認することができたことなど、多くの貴重な成果を得ることができました。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成26年3月

島根県教育委員会

教育長 今井康雄

# 例 言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。
2. 調査した場所は以下のとおりである。  
平成25年度 栃畑谷地区 字甚光院  
(大田市大森町甚光院ホ402-1、アタゴノ下タ ホ320-2)
3. 調査は次の組織で実施した。

## 石見銀山遺跡調査活用委員会

- 井上 雅仁 (島根県立三瓶自然館学芸GL)  
大橋 泰夫 (島根大学法文学部教授)  
勝部 昭 (元島根県教育委員会教育次長)  
黒田 乃生 (筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授)  
小林 准士 (島根大学法文学部准教授)  
高安 克己 (島根大学名誉教授)  
田辺 征夫 (前奈良文化財研究所所長)  
中塩 弘 (DOWAホールディングス株式会社取締役)  
仲野 義文 (石見銀山資料館館長)  
中村 俊郎 (中村ブレイス株式会社代表取締役社長)  
西村 幸夫 (東京大学先端科学技術研究センター教授)  
林 秀司 (島根県立大学教授)  
原田洋一郎 (東京都立産業技術高等専門学校准教授)  
村上 隆 (京都国立博物館学芸部長)  
和上 豊子 (前石見銀山ガイドの会会長)

## 事務局 (平成25年度)

- 野口 弘 (文化財課長) 後藤 守弘 (文化財課GL)  
松本 洋子 (世界遺産室長)  
鳥谷 芳雄 (同主席研究員) 榎原 幸春 (同企画員) 岩橋 孝典 (同専門研究員)  
田原 淳史 (同主任) 矢野健太郎 (同主任研究員) 角 俊一 (同主任)  
小杉紗友美 (同囃託)

## 石造物調査指導者

- 田中 義昭 (元島根県文化財保護審議会委員)  
池上 悟 (立正大学文学部教授)

## 調査参加者

### 現地調査

(石造物調査指導者)	池上 悟
(立正大学学生・OB)	池田奈緒子、神林幸太郎
(島根県教育委員会)	鳥谷 芳雄、岩橋 孝典、田原 淳史、矢野健太郎、小杉紗友美
(大田市教育委員会)	中田 健一(大田市石見銀山課長補佐)、青木 俊介(同主事) 野島 智実(同技師)、西尾 克己、新川 隆、尾村 勝(同囑託)

4. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター(大田市大森町イ159番地3)において保管している。
5. 本書の執筆・編集は岩橋が行った。

# 本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡と温泉津の歴史	
第1節 遺跡の位置と環境	4
第3章 栃畑谷字甚光院の調査	
第1節 調査の概要	6
第2節 字甚光院の地形及び石造物の概要	7
第3節 確認された石造物の概要	11
第4節 墓地と石造物の配置	11
第5節 各種墓石の様相	13
第6節 字甚光院の石造物調査のまとめ	16
附編1 高橋家裏(要害山南中腹)の石造物	39
附編2 清水谷地区 本法寺跡 門脇家墓所の石造物	42
附編3 下河原天満宮跡の石造物	49

# 挿 図 目 次

- 第1図 石見銀山遺跡の範囲
- 第2図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺図S=1/25,000
- 第3図 栃畑谷地区字甚光院付近の字切図（明治22年：一部加筆）
- 第4図 栃畑谷地区字甚光院・高橋家裏周辺地形図 S=1/2,000
- 第5図 石見銀山遺跡栃畑谷地区字甚光院墓地周辺図S=1/250
- 第6図 字甚光院の組合せ宝篋印塔総高・幅比較図S=1/20
- 第7図 佐毘売山神社と17世紀の大型宝篋印塔の位置関係図S=1/2,500
- 第8図 仙ノ山石銀地区の17世紀の墓地と生産・集落域の位置関係図S=1/2,500
- 第9図 字甚光院屋根頂部の石造物実測図1 S=1/10
- 第10図 字甚光院屋根頂部の石造物実測図2 S=1/10
- 第11図 字甚光院屋根頂部の石造物実測図3 S=1/10
- 第12図 字甚光院東側尾根の石造物実測図1 S=1/10
- 第13図 字甚光院東側尾根の石造物実測図2 S=1/10
- 第14図 字甚光院東側尾根の石造物実測図3 S=1/10
- 第15図 字甚光院東側尾根の石造物4及び3号岩窟実測図 S=1/10
- 第16図 字甚光院西・北側斜面の石造物実測図1 S=1/10
- 第17図 字甚光院西・北側斜面の石造物実測図2及び区割図 S=1/10
- 第18図 字甚光院1号岩窟実測図及び石造物実測図 S=1/40・1/10
- 第19図 字甚光院2号岩窟実測図及び石造物実測図 S=1/40・1/10
- 第20図 字甚光院西側斜面下段の石造物実測図 S=1/10
- 第21図 字甚光院南側斜面の石造物実測図1 S=1/10
- 第22図 字甚光院南側斜面の石造物実測図2 S=1/10
- 第23図 大谷地区高橋家裏石造物群位置図 S=1/500
- 第24図 大谷地区高橋家裏の石造物実測図 S=1/10
- 第25図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所位置図及び墓石配置図 S=1/1,200・1/600
- 第26図 門脇家推定系譜
- 第27図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図1 S=1/10
- 第28図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図2 S=1/10
- 第29図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図3 S=1/10
- 第30図 下河原地区周辺地形図及び下河原天満宮跡及び石造物配置図 S=1/2,000・1/500
- 第31図 下河原天満宮跡の石造物実測図 S=1/10
- 第32図 『石見銀山麓絵図』と『銀山町絵図』の蔵泉寺口番所付近の比較図

# 表 目 次

- 第1表 字甚光院石造物の紀年銘分布  
第2表 字甚光院付近の土地利用の変遷概念  
第3表 石造物一覧表

## 写真図版目次

- 図版1 栃畑谷地区字甚光院の石造物1 (愛宕社関連)  
図版2 栃畑谷地区字甚光院の石造物2 (愛宕社関連)  
図版3 栃畑谷地区字甚光院の石造物3 (一石五輪塔)  
図版4 栃畑谷地区字甚光院の石造物4 (一石宝篋印塔1)  
図版5 栃畑谷地区字甚光院の石造物5 (一石宝篋印塔2)  
図版6 栃畑谷地区字甚光院の石造物6 (組合せ宝篋印塔1)  
図版7 栃畑谷地区字甚光院の石造物7 (組合せ宝篋印塔2)  
図版8 栃畑谷地区字甚光院の石造物8  
図版9 大谷地区高橋家裏の石造物  
図版10 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物  
図版11 下河原地区天満宮跡の石造物

### 石造物一覧表凡例

- ・石見銀山遺跡栃畑谷地区字甚光院墓地、大谷地区高橋家裏、清水谷地区本法寺跡門脇家墓地、下河原地区天満宮跡に存在する石造物を掲載した。
- ・各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を残存高または各部材毎の高さで掲載した。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は 〕(上欠)、〔 (下欠)と示した。また推定できる文字は□内に入れて表示した。
- ・戒名及び名字は○○○とした。
- ・掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

## 第1章 調査の目的・対象・経緯

### 第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

### 第2節 調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の棟相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等のあり方を具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）がより直接的に反映されていると考えられるとの理由から、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

### 第3節 調査の経緯

石造物調査（墓石）は島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和60年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことがその始まりである。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を推えるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間など戦国期の紀年銘のある墓石が存在する地区は、生活していた時期も戦国期にさかのぼる可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなった。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るための分布調査。
- ②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するために詳細な悉皆調査。
- ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的良好などの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言

われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵琬寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、以前に分布調査を行っていた石銀地区（墓Ⅲ）の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、代官墓・奉行墓にも匹敵する規模の石塔群が造立されていることが判明した。石銀地区の史的評価を行う材料は石造物調査からも着々と提供される段階となっている。

平成24年度は、石銀地区のうち未調査であった墓Ⅴの調査を予定していたが、平成24～25年度に実施予定の世界遺産保存整備事業石見銀山地区M工区落石防護柵設置予定地に本経寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、予定を変更して急遽こちらの調査を実施した。

平成25年度についても栃畑谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとめて存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、県単自然災害防止事業石見銀山地区1工区の対象地区内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

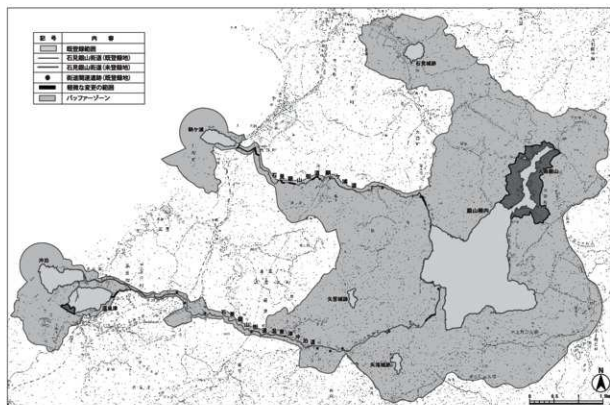
落石対策事業等の緊急調査以外に、清水谷地区本法寺跡の門脇家墓所及び下河原天満宮跡の石造物調査でまとまった成果があったので附編として掲載した。

#### 【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1－妙正寺一』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2－龍昌寺跡一』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3－安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外一』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4－長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家一）』
- 9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道一輛ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書一』
- 10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道一輛ヶ浦・沖泊集落調査報告一』
- 11 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5－分布調査と墓石調査の成果一』
- 12 島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6－温泉津地区恵琬寺墓所一』



- 13 島根県教育委員会・大田市教育委員会2007  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書7-温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)-』
- 14 島根県教育委員会・大田市教育委員会2008  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書8-温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)-』
- 15 島根県教育委員会・大田市教育委員会2009  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書9-西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地-』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(補訂版)』
- 17 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書10-金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物-』
- 18 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書11-極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』
- 19 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書12-仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査』
- 20 島根県教育委員会・大田市教育委員会2013  
『石見銀山遺跡石造物調査報告書13-本経寺墓地の調査』



第1図 石見銀山遺跡全体図

## 第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### (1) 銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており大規模な沖積平野は見られない。海岸部にまで迫る山塊群に象徴されるように、古くは「石海」「石美」とも称されたことに「石見」の語源があるともいわれている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床が知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

#### (2) 銀山の歴史的背景

石東地域では縄文・弥生時代の発掘調査例が少なかったが、近年の仁摩温泉津道路に伴う発掘調査などで資料が増加してきている。仁摩町では、潮流流域で古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで弥生時代前期からの遺物・遺構が見つかったほか、大田市島井南遺跡では、日本海を望む

丘陵上で弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡等が多数検出されている。仁摩町大内の庵寺遺跡では弥生時代中期～後期の加工段や住居跡が見つかった。また、同所の庵寺古墳群では、古墳時代前期末の精緻な箱形石棺が見つかった。副葬品に中国前漢で製作された八禽鏡が納められていた。

平安時代前半期の遺跡では、緑釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面硯が出土した大田市八石遺跡が目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁も出土していることに加えて、河口に近い川岸という立地からも海上交通の発展をうかがわせるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡の他に、奈良平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡であるが、総柱構造の主屋をもつ居宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、清原（久利・仁万）氏など在地有力武士層の関与が考えられる。また、仁摩町馬路の牧原Ⅱ遺跡では、13世紀代の鉾関連遺物が多量に出土しており、鉄生産も活発に行われていたことも知られている。

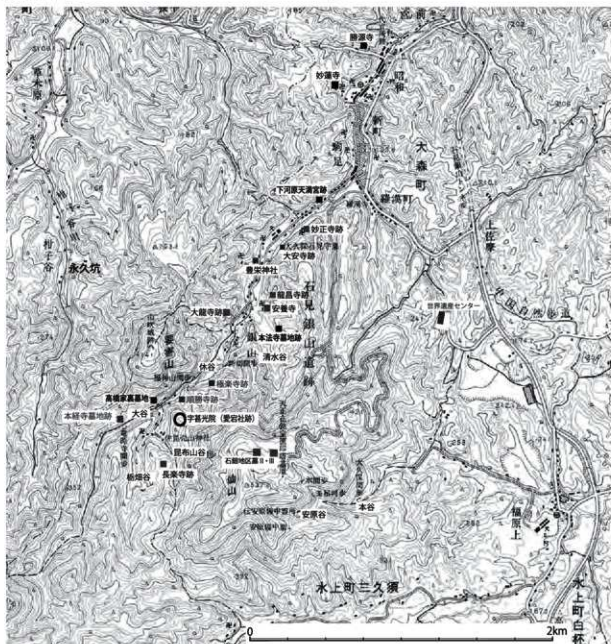
南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で大内義弘が堺で戦死し、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を武力で奪取し、石見国のうち摩摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間

(1504-1521)に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回し、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われた。

温泉津町湯里の湯里天神遺跡では15世紀代を中心とした畠遺構が検出されている。ここでは、牛耕の痕跡が確認される他、低い石垣によって耕作地が区画されており、現代に繋がる棚田・段々畠景観が15世紀には形成され始めていたことが知られる。象眼青磁など貿易陶磁が一定量存在することから、温泉郷領主の温泉氏が関与した遺跡と考えられる。

天文6（1537）年以降、大内氏、尼子氏、小笠原氏、そして毛利氏が銀山領有をめぐる争奪戦を繰り返した。それに伴う多数の城館が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には、毛利氏が尼子氏方との銀山争奪戦を有利に展開し、石見銀山の支配権を徐々に確立した。

慶長5（1600）年9月の関ヶ原の戦い直後に、徳川家康は石見銀山に禁制を発し、いち早く直轄化を図った。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は幕府直轄の石見銀山領となり明治維新を迎えている。



第2図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺図 S=1/25,000

### 第3章 栃畑谷字甚光院の調査

#### 第1節 調査の概要

本年度の石造物調査の対象地である大田市大森町字甚光院及びアタゴノ下々は、石見銀山の銀山町では中核的な神社である「佐毘売山神社」の北東150mほどの位置に所在する。当地は、仙ノ山から北西に派生する尾根の先端部に位置しており、標高は260～289mである。

当地は南西側が昆布山谷・出土谷に、西側が栃畑谷に、北西～北東側が大谷・御崎谷に面しており3方向に対して視界が開けるという眺望点でもある。(第4図)

字「甚光院」というように、かつて付近に寺院が置かれていたと想定されるが、確かな伝承も少なく寺院の性格や存続期間は不明瞭である。今回の石造物調査で「髷号」の法名が多く確認できた

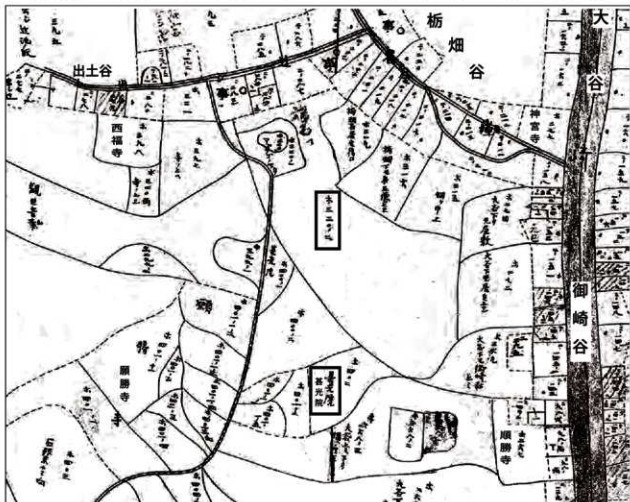
ことから、17世紀には浄土宗の寺院が存在したことが想定された。(三瓶古文書を読む会1995)

丘陵頂部には18世紀後半以降に勧請された「愛宕大権現」境内の石造物とみられる燈籠、宝篋印塔、石殿が見られるが、丘陵斜面に差し掛かるところでは16世紀末～17世紀中頃の宝篋印塔、五輪塔・光背形墓標が散乱する状態を確認された。

悉皆調査は、市道栃畑谷三久須線に対して、落石の発生源と考えられた約3,000㎡について実施した。南に隣接する平坦面(字甚光院#400-2)や愛宕社の立地する尾根の基部側にも石造物が存在するため、当地域の石造物の網羅的な調査とはなっていない。

#### 【参考文献】

三瓶古文書を読む会1995『石見銀山百か寺』



第3図 栃畑谷地区字甚光院付近の字切図(明治22年：一部加筆)

## 第2節 字「甚光院」の地形及び石造物 の概要

字甚光院は、仙ノ山から北側に派生する尾根先端に位置している。尾根頂部は、標高279～282mであり、東西23m×南北13mの不定型な平坦面となっている。当地周辺においては、標高265m以上の部分では露岩が多数有り、丘陵頂部付近も岩盤や浮石が露出して奇観を呈している。

このような、露岩も取り込んで「愛宕社」の参道や燈籠基壇などが設けられており、山岳信仰の性格が強い「愛宕社」の境内空間として印象的なものとなっている。(第5図)

愛宕社の参道は、字甚光院ホ400-2の平坦面北西隅から始まる。最下部は岩盤を削って石段を造り出している。露岩の間を縫うように参道を登り、丘陵の西側先端から北西側に回り込むように登り、頂上の丘陵平坦面に達する。平坦面に達する直前の279m付近の道の両側にある露岩には、それぞれ一辺20cmほど柱穴が削り込まれている。「鳥居」、「燈籠」、「旗」などの施設が設けられていたものと考えられる。

愛宕社は、小規模な木造社殿であった可能性があるが、「石殿」の部材も存在するので石製社殿が本殿であった可能性もある。

丘陵頂部縁辺から斜面にかけては、16世紀末～17世紀前半にかけて造立された宝篋印塔・五輪塔などが多数散乱している。これらの石塔の中で本来の樹立状態で残っているものは、3号岩窟の内部に納められていた56号宝篋印塔のみであった。

17世紀後半期の造墓痕跡は確認できないが、18世紀前半以降には造墓地域が丘陵地南側の平坦面(字甚光院ホ400-2)に移行する。このことから、17世紀前半の造墓活動の主体者は1664年前後で断絶し、祭祀活動も継承されていないことが考えられる。そして、18世紀になって別集団が丘陵南に位置する平坦面に造墓を開始したことが推察できる。

丘陵頂部は、その後利活用の無い状態であった

と考えられるが、寛政元(1789)年頃に描かれたと推定される「石見銀山麓絵図」(高橋家文書)には、「アゴ社」が描かれているため、18世紀後半には愛宕社が存在したのと考えられる。愛宕社が18世紀のどの時点で勧請されたのかを示す史料は不明であり、その成立解明については今後の課題である。

字甚光院を含む石見銀山遺跡大谷、昆布山谷、出土谷、栃畑谷地区の周辺では、平成13年度に石造物分布調査が実施されている。

その成果は『石見銀山遺跡石造物調査報告書5』に掲載されており、字甚光院は「32群」として記載され、総数493基の石造物がカウントされた。その内訳として、一石宝篋印塔140基、一石五輪塔110基、組合せ五輪塔3基、組合せ宝篋印塔25基、角塔200基、石仏3体の記載がある。永久鉦床側の銀生産域(大谷、栃畑谷、昆布山谷、出土谷)内では、妙本寺跡上墓地の488基を上回る最大数の墓群である。(島根県教育委員会・大田市教育委員会2005)

平成13年4月16日に字甚光院付近の分布調査が行われた際には、「愛宕大権現」の燈籠も確認され調査票には記載されているが、その後特に検討されることもなく今日に至っている。

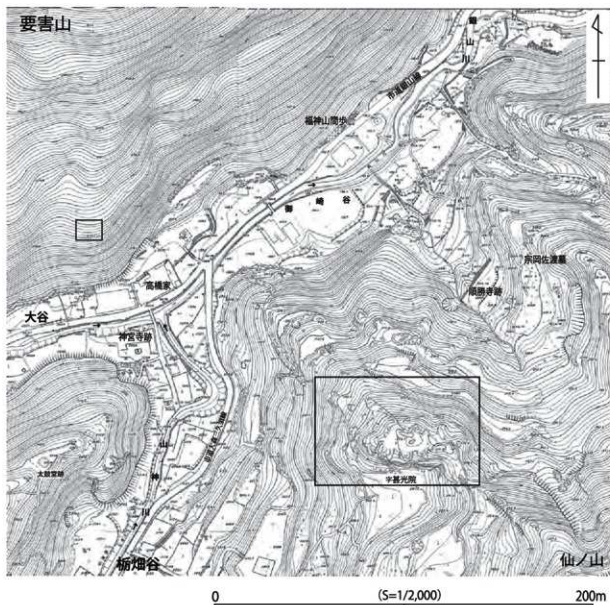
今回の悉皆調査の範囲は落石対策事業の影響範囲に限定されるが、当該地域では、組合せ宝篋印塔16基以上(台座7、基礎5、塔身1、笠14、相輪16)、一石五輪塔20基、一石宝篋印塔41基、二石宝篋印塔1基、地藏2基、光背形墓標3基、燈籠2基、石殿3基、台座4基の計92基が確認された。

丘陵地南側の標高263m付近に広がる平坦面(字甚光院ホ400-2)や、佐尾山神社神主三家のうちの一つ、A家墓地の所在する標高279～280mの平坦面には、まだ多くの石造物が所在している。

また、調査を行った丘陵南斜面には、少なくとも5ヶ所の人工的に岩盤を掘削して石室状に造り出した岩窟があり、内部に石造物を安置していたことが確認された。石見銀山遺跡ではしばしば見られるものであるが、狭い地域に5基の岩窟があることは稀である。

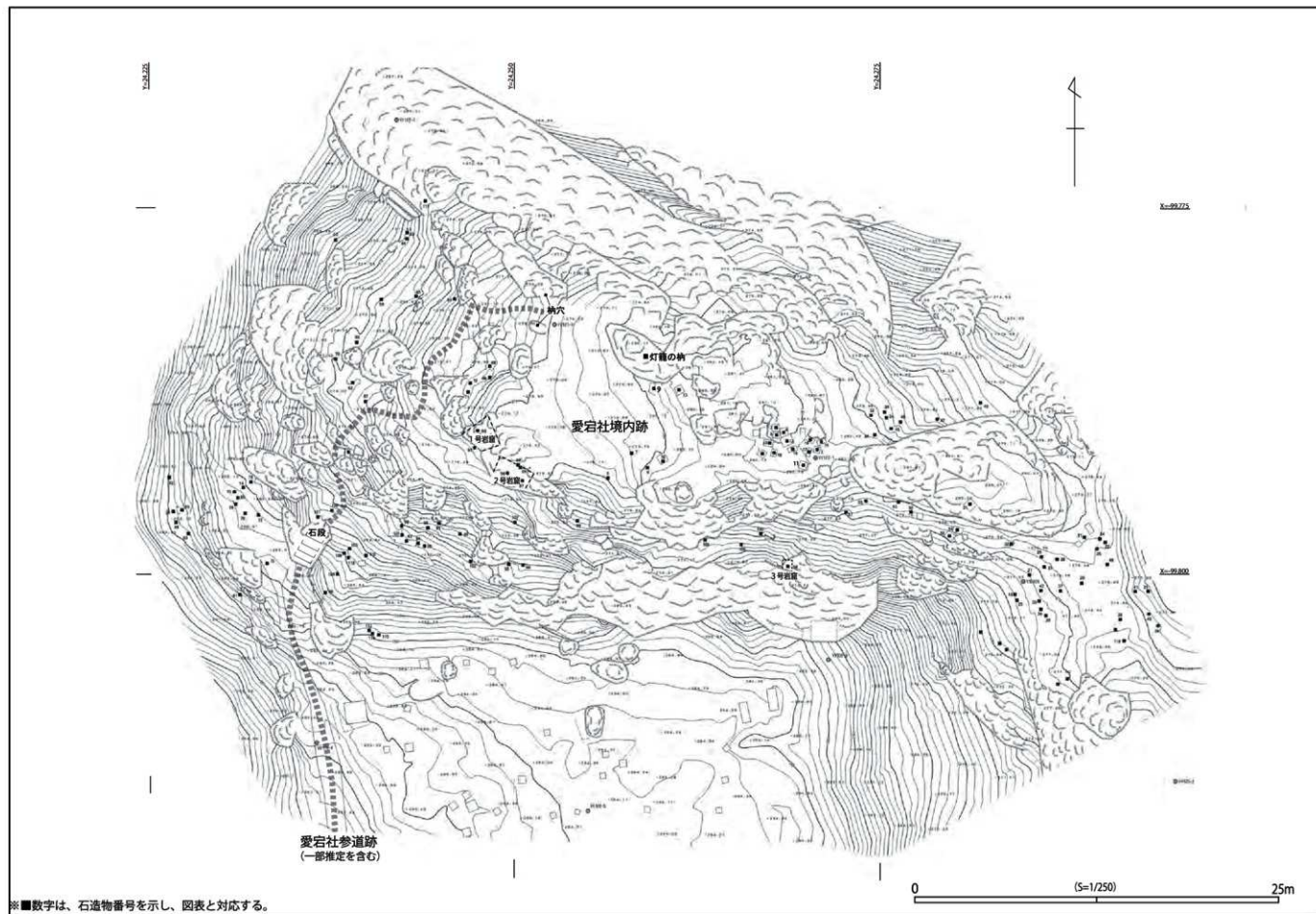
【参考文献】

島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』



第4図 柳畑谷地区宇基光院・高橋家裏周辺地形図 S=1/2,000

□内が平成25年度石造物調査地域



※■数字は、石造物番号を示し、図表と対応する。

第5図 石見銀山遺跡栃畑谷地区字甚光院墓地周辺図 S=1/250

### 第3節 確認された石造物の概要

字甚光院墓地では今回の調査において、いくつかの形式の存在を確認することができた。ここでは、各石造物の様相について記す前に、字甚光院墓地において確認できた形式について、その概要を記すこととした。なお、基本的に石材は、大田市温泉津町福光で産出される石材である福光石である。(第9図～第22図)

#### 一石宝篋印塔

方柱状の石材を、上から相輪・笠・塔身・基礎と加工して造作された墓塔である。これまでの調査で石見銀山においては、この形式が中世末期から近世初頭にかけて石造物の半数近くを占めることが明らかとなっている。字甚光院墓地においては、41基を調査した。

また、相輪部だけを別材で製作する「二石宝篋印塔」も1基確認している。

#### 一石五輪塔

一石宝篋印塔と同様、方柱状の石材を加工するもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪が造作されている。字甚光院墓地においては、20基を調査した。一石宝篋印塔には及ばないが石見銀山遺跡では16世紀～17世紀を代表する墓塔型式の一つである。

#### 組合せ宝篋印塔

塔を構成する相輪・笠・塔身・基礎がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。その特性ゆえに本来の組み合わせを維持したまま樹立しているものはないため、実数の把握は難しい。字甚光院墓地では笠部が14基分、相輪部が16基分確認されており、最小でも16基は造立されていたと考えられる。

#### 光背形墓標

仏立像の光背のように 縦長の本体の頂部が尖り、上部幅に対して下部幅が狭い形態の墓標である。字甚光院墓地におい1号岩窟内で2基、南斜面で1基確認されている。温泉津町西念寺3・4号岩窟では、完形品が遺存しているが、石見銀山周辺では類例の少ない墓標形式である。17世紀初頭の限られた時期に製作されたものである。

#### 地藏

字甚光院墓地では、座像のものが頂上部で1体、西斜面で立像1体を確認している。

#### 石殿

石見銀山では、寛永12(1635)年に没した二代奉行・竹村丹後守道清墓で採用され、以後急速に普及した墓・祠の荘厳施設である。字甚光院では尾根頂部の愛宕社に伴って設けられたと考えられる。壁材を積み込むコ字形の溝を削り込んだ底板が3基確認された。

#### 燈籠

愛宕社に伴うもので、燈籠の笠部分1基、竿部分1基が確認された。竿部分には「愛宕大権現」の銘文が刻まれる。竿部分は直線的に裾が広がるもので西ノ屋型燈籠と神明型燈籠の折衷的な形態である。

### 第4節 墓地と石造物の配置

便宜上、尾根頂部、東側尾根部、北・西斜面、西斜面下段、南斜面にわけて記述する。(第17図参照)

#### 尾根頂上部

頂上部は、現状で東西22m、西端部の南北幅は12m程を測り、平面形は歪な三角形形状を呈している。標高は、279～280mで西へ行くほど低くなっ



て行く。

頂上平坦面の北西端には、上面を平滑に整え、一辺20cmほどの納穴を穿った露岩が二石見られる。愛宕社の燈籠若しくは鳥居を設置したものと考えられ、この部分が境内入り口として整備されていたと考えられる。

平坦面の中央部から北東辺にかけては、岩盤が露出し、1mほど舞台状に迫りあがっている。この部分に石殿底板13や燈籠11が残されており、愛宕社の主要な施設が設けられていたものと推定される。

平坦面の東端には、愛宕社に伴う宝篋印塔、燈籠基礎などの部材が多数集められている。また、南辺中央付近には17世紀初頭に位置づけられる一石五輪塔6、7が、また平坦面東端には組合せ宝篋印塔の反花付台座4などが見られた。

18世紀以降の愛宕社の勧請・整備に伴い、もともと頂上部に所在した17世紀代の石造物は片付けられたものと推定されるが、このように尾根頂部の一角には17世紀代の状況を残している。当地区では19個体を実測した。

#### 東側尾根部

尾根頂部の東側に接続する部分で、標高は278～280mである。尾根頂部との標高差はほとんど無いが、巨大な岩塊が介在しており尾根頂部側とは一体感がない。岩塊上には現在組合せ宝篋印塔の反花付台座31が所在するのみで、他の石造物は所在しない。

岩塊の北側裾、南側裾にはそれぞれ一石宝篋印塔、一石五輪塔が数基所在する。また、南側裾には組合せ宝篋印塔の反花付台座が3基分（32、52、54）存在するため、丘陵の南側を意識して大型宝篋印塔が造立された可能性がある。

仙ノ山方面に続く尾根の東端部には、中小規模の組合せ宝篋印塔、一石五輪塔、一石宝篋印塔が複数基存在する。

東側尾根については、17世紀初頭頃に造立され

た石造物のみが存在することから、18世紀以降の愛宕社などの再利用は及ばなかったものと考えられる。

なお、標高105m付近の急斜面の露岩には、3号岩窟が設けられ、一石宝篋印塔57が造立当初のまま樹立している。今年度調査区域の中で造立当初の状態に樹立している墓塔は57が唯一の存在である。当地区では石造物40個体を実測した。

#### 北・西側斜面

尾根頂部の平坦面の北側及び西側に接続する標高270～277mの斜面部分で、出土谷方面から愛宕社に至る参道が通過する部分でもある。愛宕社参道と推定される部分では、17世紀の石造物は片付けられているが、その周囲には石材が散乱している様子が見られる。

尾根頂部直下の部分では、1号岩窟（入口幅2.6m、奥壁幅2.9m×奥行き1.9m、高さ1.8m）、2号岩窟（入口幅3.7m、奥壁幅4.45m×奥行き2.5m）が南西方向へ向けて開口している。

1号岩窟は、奥壁に沿って幅40～50cm、高さ20cmほどの段状の造り出しを設け、その中央部に2個の納穴を穿ち光背形墓標88、89を安置している。

この光背形墓標は、納を含む基部しか残存していないが、1号岩窟の中心的な祭祀対象が光背形墓標であることは特筆できる。

2号岩窟も奥壁際の一部に奥行き20cmほどの段状施設を設けているが、納穴等は見られない。

これらの岩窟は、17世紀に開削され墓所として使われており、光背形墓標や組合せ宝篋印塔の残欠が遺存している。18世紀以降に愛宕社が勧請された後は、その宗教的な佇まいから、愛宕社に関係する施設として二次的な利用が行われた可能性がある。

北西側の斜面では、一石宝篋印塔や組合せ宝篋印塔がみられる。特に63は文禄三年の紀年銘を持ち、当調査区内では最古の石塔である。

59・60など復元総高が160cm前後となる大型宝篋印塔が所在することなどからみれば、栃畑谷入口方面への視界を意識して造立されたがうかがえる。当地区では20個体の石造物を実測した。

#### 西側斜面下段

上記の北・西側斜面から岩塊を挟んで下方の、標高263～266mの間に所在する2段の平坦面上に石造物が所在する。

上段の平坦面は265～266mの間にあり、一石五輪塔、一石宝篋印塔のほか、組合せ宝篋印塔73、石殿底石80などが所在する。当所の一石宝篋印塔は、塔身にキリクの入った日輪を表現しているものが3基（75、74、81）以上は存在することが特徴的である。当地区では14個体を実測した。

#### 南側斜面

前述した各地区の南側に接する斜面で、標高265～275mの間に所在する。標高270mと271m付近では基壇と見られる板石が並んで遺存している箇所があり、斜面中腹に狭長な平坦地を造成して墓地を設けていることが想定された。特に基壇を伴うと推定される組合せ宝篋印塔92、93、94などは総高160～190cmの規模を持つ大型塔に復元することが出来る。この大型宝篋印塔群は南側の出土谷を隔てた尾根上に所在する佐毘売山神社からの見栄えを意識して造立されたものと考えられる。

当地区では、一石五輪塔、一石宝篋印塔、光背形墓標など17世紀初頭の墓群が展開していた様子がうかがえる。さらに南側の標高264m以下の部分では、奥行き（東西）30m×幅（南北）20mほどの広い平坦面が存在する。この平坦面では、18世紀以降の墓地群が展開することから、愛宕社勧請以降はこの平坦面が墓域として活用されたものと考えられる。

この南側斜面では合計25個体を実測した。本来斜面部に造立されながら、標高264m以下の地点に転落した墓石も多いものとみられ、現に多くの

一石宝篋印塔、一石五輪塔が確認できるが今年度の悉皆調査は斜面部分に限定し、平坦面の調査は今後委ねることとした。

#### 第5節 各種墓石の様相

字基光院で確認できた石造物は7種類で、その他に石塔・燈籠の下に敷く台（板）石がみられる。（第9～22図）。以下、個別に様相を述べる。

**一石五輪塔**は、尾根頂部に2基、東側尾根に6基、北・西側斜面に1基、西側斜面下段に4基、南側斜面に7基がみられる。

最大のものは総高75.5cmの105、最小のものは復元総高42cm程度の78である。

紀年銘があるものは6基で、慶長3年（2基）、同8年、同12年、寛永元年、寛文3年銘が確認できる。

**一石宝篋印塔**は、尾根頂部に1基、東側尾根に18基（二石宝篋印塔1を含む）、北・西側斜面に10基、西側斜面下段に6基、南側斜面に7基がみられる。

相輪部が欠損する個体が多いので断言は出来ないが、大きいもので総高95cm前後、小さいものは復元総高70cm程度である。

紀年銘があるものは11基で、文禄3年、慶長元年（2基）、同6年、同12年、同19年、元和元年、寛永6年（2基）、寛永7年（2基）の紀年銘が確認できる。

西斜面下段に所在する74、75、81と南斜面に所在する102は、塔身に直径8cm弱の日輪を線刻し、内側に梵字でキリク（阿弥陀如来）を刻む。また、南斜面に所在する115のように、塔身に梵字キリクだけを刻み日輪を省略している例もある。このように塔身に日輪・梵字を刻むのは南斜面・西斜面下段に造立されているものだけであり、東側尾根に18基造立されているものには見られないことから、墓域による何らかの特徴が現れ

ている可能性がある。

また、東側尾根に所在する47は、慶長元年の紀年銘を持つものであるが、笠部、塔身、基礎を一石で作り、相輪部だけを別材とする「二石宝篋印塔」である。石銀地区墓Ⅲの3-38は慶長二年の紀年銘をもつ「三石宝篋印塔」であるが、慶長初年前後には、このような一石宝篋印塔と組合せ宝篋印塔の中間的な宝篋印塔が試行的に製作された可能性もある。石見銀山では未だ類例の少ないものであるが類例の増加を期待したい。(島根県教育委員会ほか2012)

**組合せ宝篋印塔**は、笠部14基、相輪部16基、基礎5基、塔身1基、台座7基が確認された。相輪部の個体数からみて最小でも16基以上が存在することになる。各部位が別造りのため本来の組合せや数量を確認することは困難である。

**尾根頂上部**では、18世紀以降の愛宕社に伴う施設として造立された福光石製の宝篋印塔(1・2・3)が目される。塔身の各四面には、陽刻された請花に載った日輪内に金剛界五仏の梵字が刻まれている。笠部は軒下4段、軒上6段が表現され、17世紀代の墓塔として樹立される宝篋印塔形式とは一線を画しており、羅漢寺宝篋印塔(1771年)や城福寺(仁摩町仁万)宝篋印塔にみられるように、寺院・神社内の供養塔的な石塔と見ることが出来る。羅漢寺・城福寺の宝篋印塔は花崗岩製であり、施主も徳川将軍家親戚の田安宗武や銀山附役人の中山賀光らが寄進しているため整美な作りである。こういった中央形式の宝篋印塔造立に触発されて福光石で製作されたものが愛宕社に寄進されたと推測される。(鳥谷2004)

これとは別に、台座4のように17世紀前半の組合せ宝篋印塔の部材が見られることから、愛宕社勧請以前は17世紀代に造立された墓塔が尾根頂上部にも所在したことがわかる。

**東側尾根部**では、相輪部4基、笠部6基、基礎1基、反花付台座4基を確認している。現存して

いる相輪部20、笠部27、基礎30などから復元した個体では復元総高150cm程となり、大型の宝篋印塔が樹立されていたと考えられるが、字基光院内の他の区域と比較すると若干サイズが小さい。ただし、請花付台座4基は、何れも基礎部を受ける部分の一边が40cmを越え、中でも54は一边67cmの基礎を載せることが出来る仕様になっている。200cm近い大型宝篋印塔の部材が下方に転落している可能性もあり、下方平坦地の調査が期待される。

**北・西側斜面**では、相輪部4基、笠部2基、台座1基が確認されている。66は台座が原位置で残存しており、尾根頂部から1.5mほど下った標高277.5m付近に造立されていたことがわかる。59、60は相輪部、笠部しか残存しないが推定総高160cmほどの大型宝篋印塔に復元できる。

また、1号岩窟内には相輪部86が、2号岩窟内には相輪部90が残されていた。

**西側斜面下段**では、上方から転落したと考えられる笠部73が1個体確認された。

**南側斜面**では、相輪部6基、笠部3基、基礎3基が確認されている。92は、塔身部のほか相輪の一部や笠の一部が欠損するが、台座を含めた推定総高は190cm前後となるもので、字基光院の調査区では最大の宝篋印塔である。92は、標高271.3m付近に厚さ20cmの台座が原位置で遺存していることから、当初の造立地点が特定できる。

また、相輪部94は、92の相輪部とほぼ同じ大きさである。93、114も復元総高が160cm前後と推定できるので字基光院の中でも南側斜面は、特に大型宝篋印塔が多く造立された区画といえよう。

**光背形墓標**は、1号岩窟内の88、89と南側斜面の112の3基が確認された。

温泉津西念寺の3・4号岩窟で完形品が知られているので、それを参考とすると、高さ130~150cm程度の墓標に復元することが出来る。西念寺の例では、基部に接して請花を施し、上部の広い区

面の中央に「南無阿弥陀仏」の御名号を配しており、浄土宗特有の墓標である可能性がある。字甚光院の墓地は、法名に号号を持つものが多いことから浄土宗墓地と考えられる。石見銀山内の浄土宗寺院としては、大安寺、安立寺、極楽寺、西向寺、西福寺の5ヶ寺のほか、石銀地区墓Ⅲに接して所在した報恩寺（元禄2年に五十猛に移転）があげられるが、これらの寺院や墓地では今のところ光背型墓標は確認されていない。字甚光院の光背形墓標は銀山地区では稀少な例と言えよう。（島根県教育委員会ほか2007）

**地藏**は、尾根頂部で座像8が、西側斜面下段で立像85の2体が確認されている。

8は、愛宕社の勧請に伴って「愛宕神」の垂迹とされる勝軍地藏として製作された石像と考えられる。石殿の部材が周囲に所在するので、本来は石殿内に祀られていた像であろう。廃仏毀釈の際に頭部、腕などが毀損されたらしく胴体部分しか残存していないが、袈裟の表現がみられる。

85は、請天台座と光背を一体で成形した地藏立像である。毀損されることなくほぼ完形で残存している。胸元に右手を置き、やや下方に左手を表現し、両手で棒状の持物を持つ表現がなされている。持物は「数珠」の可能性もあるが表現が簡略であるために断定は出来ない。

**石殿**は、尾根頂部に12、13が所在し、西側斜面下段に80が所在する。

12は、奥行き84cm×幅80cm、高さ15cmの一石の底板で、上面に幅8cm、深さ6.5cmの壁板落とし込み用の溝が削り込まれている。溝は「コ字形」を呈し、背面にV字状の排水用切り込みがあり、前面側は開いている。壁の内法は奥行き63cm、幅48cmで、壁溝の無い前面中央には、深さ1.5cm、幅6cmほどの双円状の小孔が穿たれている。この双円状小孔は「落とし錠」の穴と考えられ、木製の扉が付けられていたと想定される。石殿の構造

は「柱無し別材型」とされるものである。

13は、奥行き54cm×幅54cm、高さ15cmの一石の底板で、上面に幅7cm、深さ0.5cmの壁板落とし込み用の溝が削り込まれている。溝は「コ字形」を呈し、前面側は開いている。壁の内法は奥行き34cm、幅30cmで、壁溝の無い前面両端には、直径2cm、深さ3cm、小孔が穿たれている。木製の観音開き扉の軸受の小孔と考えられる。

80は、前後二～三石で構成される石殿底板の手前側部材の破片である。推定される幅は91cm前後、高さは9cmである。底板上面には幅6cm、深さ5センチの壁溝が施され、石殿内法幅は64cmとなっている。前2者と異なり、石殿の前面にも壁材が回り込み、開口部（扉）が前面中央部2/3となる。また、開口部付近で底板が掻き取られて平面形は「凹」形を呈している。

石見銀山遺跡では、1635年に没した第2代奉行竹村丹後守道清の墓に初めて本格的な越前式石廟が採用され、それ以降小型の石殿が普及するとされている。（関根2011）

石見銀山遺跡の石殿は17世紀後半には衰退に向かうとされてきたが、字甚光院の石殿は18世紀代の愛宕社勧請の際に製作されたと考えられるため、社寺用の石殿の製作は江戸時代後半まで断続的に行われたと考えられる。

**燈籠**は、尾根頂部で「愛宕大権現」銘のある竿部9と、笠部10が確認されている。また、11、14～19の板材は燈籠の台座の可能性のある部材である。

9は直線状に裾が開く竿部で、中台を受ける上端部には直径10cm、高さ3cmの柄を造り出している。下部は隣接する岩盤上に造り出された柄に差し込むよう内削りがなされている。竿部分は直線的に裾が広がるもので西ノ屋型燈籠と神明型燈籠の折衷的な形態である。

10は、宝珠が載る笠部分で正面側には底下に日輪と木葉文を施している。このモチーフは18世紀

前半～中頃に流行した位牌型墓標と共通している。

10は、燈籠の台座と考えられる石材で、側面2面に銘文が見られる。1面は「石工福光村 坪内忠兵衛 同名甚七郎」。2面は「願主 松原常 常右衛門 長谷喜惣治 松原菊太郎 同名市松」である。1面は燈籠の製作者として、福光村の石工・坪内忠兵衛と子息甚七郎の名が刻まれ、2面には寄進者として銀山町住人で役人・銀山師と思われる松原・長谷氏の名が刻まれている。

14～19は二石一セットになる台座で、一辺63.5×64.5cm前後のほぼ正方形となる規格である。上面中央部は粗い鑿痕跡を残しているの、上に載る石材は裾広のものか、あるいは同規模の台座を2段以上積んで使用していた可能性がある。

#### 【参考文献】

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7 温泉津地区の石造物調査と西念寺墓地悉皆調査(1)』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12-仙ノ山 石見地区墓Ⅲの調査-』

関根達人 2011「石廟の成立と展開」『日本考古学』第32号 一般社団法人日本考古学協会

鳥谷芳雄 2004「羅漢寺五百羅漢の造立棟札」『石見銀山遺跡調査ノート3』島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会

## 第6節 字甚光院の石造物調査のまとめ

榎畑谷地区字甚光院の石造物調査では、石造物122点を実測した。内訳は、組合せ宝篋印塔16基以上(台座7、基礎5、塔身1、笠14、相輪16)、一石五輪塔20基、一石宝篋印塔41基、二石宝篋印塔1基、地藏2基、光背形墓標3基、燈籠2基、石殿3基、台座4基の計92基が確認された。

調査区に隣接する範囲にも石造物は存在してい

るため、この地域の様相を完全に把握したわけではないが、一定の成果を得ることが出来たと考えられる。

ここでは、①石造物からみた字甚光院の土地利用変遷。②17世紀代の墓域としての意義。③18世紀以降の愛宕社勧請の意義、について注目してみたい。

#### ◆造墓開始時期

紀年銘のある墓石は、19基確認された。最古の紀年銘は文禄三(1594)年の一石宝篋印塔(第16図-64)であり、最新のものは寛文三(1663)年の一石五輪塔(第16図-71)である。その内、文禄～慶長年間には12基、寛永以降に7基が造立されており、17世紀初頭に墓地造営のピークがあるといえよう。

#### ◆墓地造営の断絶と再開

石見銀山遺跡での墓塔型式の変遷では、17世紀中頃～後半に中世的な一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔が衰退し、替わって円頂方形、円頂方柱墓標などを主体とする墓標系墓塔への移行が認められる。

今年度の悉皆調査範囲では、18世紀代の墓標系石塔は1基も確認できなかったが、南側平坦面には18世紀前半代に製作された納を持つ位牌型墓標や円頂方形墓標が見られるため、造墓域が移動したことが考えられる。

ただし、両者の間には50年前後の年代的隔りがあり、17世紀前半代に墓域を営んだ集団と18世紀に墓域を営んだ集団の間に系譜関係を認めることは困難である。

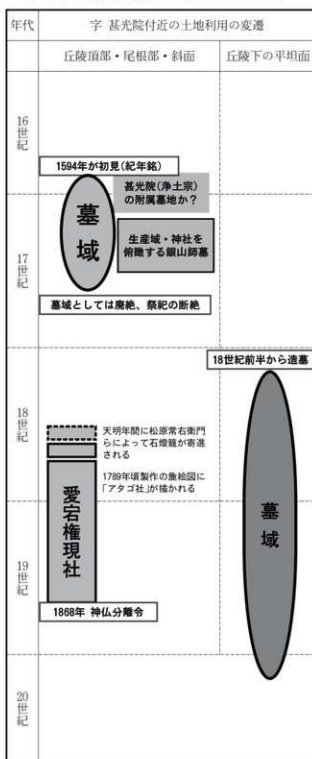
18世紀以降、字甚光院の尾根頂部や周辺の斜面地は、新規の墓地としての使用は全く認められないばかりか、17世紀に造立された墓塔の祭祀行為も絶え、管理行為も行われな「放置」状態であったと考えられる。

第1表 字基光院石造物の紀年銘分布(16世紀末~17世紀中頃)

西暦	元号	組合宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔
1590	天正十八年			
1591	十九年			
1592	天正二十/文禄元年			
1593	文禄二年			
1594	文禄三年		△	
1595	文禄四年			
1596	文禄五/慶長元		◆◆	
1597	慶長二年			
1598	慶長三年			◆□
1599	慶長四年			
1600	慶長五年			
1601	慶長六年		◆	
1602	慶長七年			
1603	慶長八年			●
1604	慶長九年			
1605	慶長十年			
1606	慶長十一年			
1607	慶長十二年		□	◆
1608	慶長十三年			
1609	慶長十四年			
1610	慶長十五年			
1611	慶長十六年			
1612	慶長十七年			
1613	慶長十八年			
1614	慶長十九年	□	□	
1615	慶長二十/元和元		▼	
1616	元和二年			
1617	元和三年			
1618	元和四年			
1619	元和五年			
1620	元和六年			
1621	元和七年			
1622	元和八年			
1623	元和九年			
1624	元和十/寛永元年			◆
1625	寛永二年			
1626	寛永三年			
1627	寛永四年			
1628	寛永五年			
1629	寛永六年		△△	
1630	寛永七年		◆◆	
1631	寛永八年			
1632	寛永九年			
1633	寛永十年	△		
1634	寛永十一年			
1635	寛永十二年			
1636	寛永十三年			
1637	寛永十四年			
1638	寛永十五年			
1639	寛永十六年			
1663	寛文三年			△

- 凡例 ● 尾根頂部  
◆ 東側尾根部  
△ 北・西側斜面  
▼ 西斜面最下段  
□ 南側斜面

第2表 字基光院付近の土地利用の変遷概念



#### ◆17世紀の大型宝篋印塔の立地をめぐって

今年度の悉皆調査によって、字甚光院には17世紀初頭の大型宝篋印塔が複数基造立されていたことが確認された。

17世紀初頭に銀生産の最盛期を迎えた石見銀山の中でも、特に銀生産の中心地的な地域であった福石鉱床や永久鉱床周辺に所在する墓域の調査が進められている。石銀地区の墓Ⅱ・Ⅲや本谷・安原谷地区の釜屋間歩周辺に位置する伝安原備中墓所に加え、永久鉱床側で字甚光院の悉皆調査がなされたことで、17世紀初頭の銀生産域内での造墓の様相について検討可能な状況となってきた。字甚光院を含む栃畑谷、昆布山谷、出土谷を含んだ永久鉱床エリアの様相から確認してみたい。

ここでは、大型宝篋印塔について検討を行うが、「大型」とする指標は、基礎・塔身・笠・相輪を足した総高が150cm（約5尺）を越えるものとする。各部材ごとの高さでみれば、相輪70cm、笠25cm、塔身25cm、基礎30cmを上回れば大型塔となる可能性がある。

字甚光院の調査で、この指標を上回った宝篋印塔は、東側尾根で1基（27+30）、西・北側斜面で3基（59、60、90）、南側斜面で4基（92、93、94、114）である。

中でも南側斜面の92は、台座部分まで含めた復元総高が190cm前後になるものと考えられ、当調査区で最大の宝篋印塔である。また、相輪部のみ残存している94も、92とほぼ同規模と推定される。93、114の相輪部は残存状態が悪いが宝珠の幅が23～25cmと広く、他の調査区の相輪部を上回っている。

北側斜面に位置する59、60は総高160cm前後の宝篋印塔に復元できる。この2基は、台座などが確認できないので、元々尾根頂部に所在したものが片付けられた可能性もある。

さて、このように字甚光院の丘陵では、南側斜面に4基以上の大型宝篋印塔が造立されていることがわかる。そして、これらの大型宝篋印塔は標

高270m付近と、271m付近の2段にわたって、台座石を置いて造立されている。

現在では、この場所からは樹木や竹林に遮られて眺望は良くないが、樹木等がなければ、眼下に佐毘売山神社や出土谷・栃畑谷集落を見下ろすことが出来るはずである。佐毘売山神社境内は標高230mであることから、大型宝篋印塔群との比高は40m以上となり、銀生産域、生活域ばかりでなく神社をも見下ろす立地となるのである。

見方を変えて、佐毘売山神社境内からの視点でみると、墓域の設定意図はさらに明確になる。神社境内から正面を仰ぎ見れば、神社の壮大な拝殿が見える。同じ仰角で境内の左方を見れば、字甚光院の大型宝篋印塔群、岩窟がよく見えるのである。さらに、神社の右方の丘陵上（妙本寺上墓地）にも大型宝篋印塔群が立地していることが確認されているのである。（第7図）

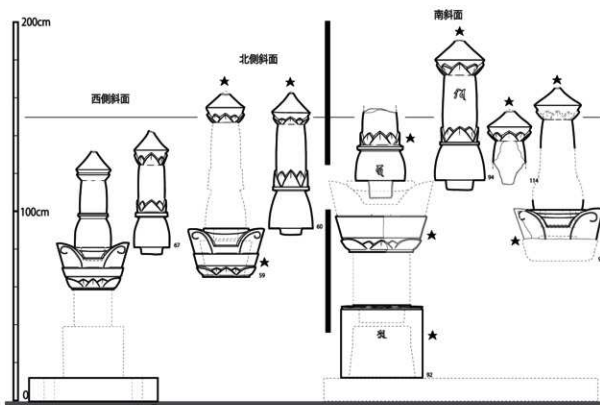
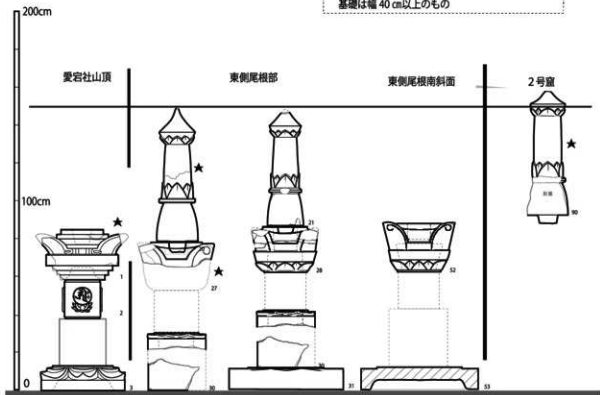
つまり、17世紀初頭の佐毘売山神社周辺の空間構成の中で、大型宝篋印塔群を含む墓域の設定は意図を持って行われている可能性がある。鉱山生産の信仰の中心である佐毘売山神社を正面に拝し、左方丘陵に字甚光院の大型宝篋印塔群・岩窟、右方丘陵に妙本寺上墓地を拝するように設定されているのである。

このような、祭祀空間に組み込まれた墓地に葬られた人々は、どのような階層に属するのだろうか。墓石には成名だけが記され、生前の名や職はわからないので正確なことは不明である。しかし、銀生産地域内の墓地であり、武士階級の墓とは考えにくいことから、17世紀初頭の銀生産に直接的に関わった銀山師等が葬られた可能性は指摘できるであろう。

16世紀末～17世紀初頭の石見銀山最盛期を招いた名誉ある銀山師達を祭祀の対象として、佐毘売山神社の左右に墓所を配するという「視覚的な仕掛け」を想定した。しかし、この「仕掛け」は17世紀中頃に銀製産量が急減すると共に機能を停止する。この墓群を造営・祭祀していた集団自体が

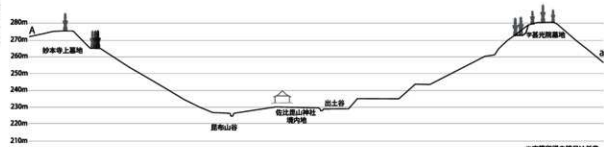
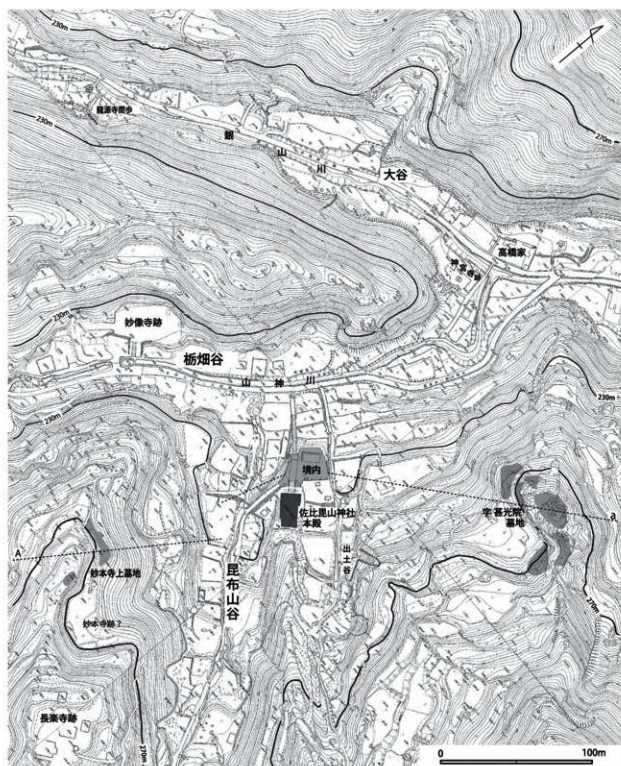
★印

相輪は宝珠または伏鉢の幅が20cm以上あるもの、  
 笠部は隅飾端間の幅が40cm以上あるもの、  
 基礎は幅40cm以上のもの



第6図 字基光院の組合せ宝篋印塔総高・幅比較図 S=1/20





※宝篋印塔の縮尺は任意

第7図 佐比良山神社と17世紀の大型宝篋印塔の位置関係図 S=1/2500

銀山生産減少と同時に衰退し、墓地の造営や祭祀を継続できなくなったことは17世紀中頃以降の墓石が確認できないことから推測されるのである。また、この造墓活動の衰退現象からもこの墓群の造営主体が有力銀山師集団であることが言えるのではなからうか。

では、石見銀山内のもう一つの銀生産の中心地である石銀地区について見てみたい。(第8図)

石銀地区墓Ⅱは、本谷と於紅ヶ谷の結節点付近に位置し、石銀藤田地区と千畳敷地区を見下ろす歪な長円形の丘陵頂部に立地する。頂部の平坦面は標高487～488mで、幅13～25m、長軸は90m近くに及ぶ歪な長円形を呈している。

尾根頂部は広大で、造墓スペースはかなり余裕があるように見えるが、実際に墓地として使用されている空間は北端部の13×25mの範囲だけである。ここに、3基マウンドを構築しているが、北端のものは自然地形を整形して築いているのに対し、中央と南側のマウンドは一辺2mの四辺を石積し、内部の盛土には「ズリ」を用いている。

北端のマウンドは石塔を伴わないが、中央と南側のマウンドにはそれぞれ反花付台座を含めた総高が188cm、177cm前後と想定される大型宝篋印塔が樹立されていた。この2基は紀年銘から元和四(1618)年と元和七(1621)年に造立されたものと推定されている。

墓Ⅱは、石銀地区中央の丘陵頂部に立地するだけでなく、十分な造墓スペースがあるにも関わらず丘陵北端部に選地し、わざわざマウンドを築いてその上に宝篋印塔を樹立していた。これは、ただ銀生産域である石銀藤田地区、千畳敷地区からの眺めを意識したわけではなく、それ以上に「大森町への眺め」を重視した結果であろう。墓Ⅱの現地に立てば、そこから大森町の代官所、城上神社、観世音寺などの主要な施設を俯瞰できることは身を以て体感できる。ところが、この墓Ⅱの位置から少し南側に後退すると、大森町方面への眺望は手前の尾根によって遮断されてしまい視認す

ることができない。

墓Ⅱの立地とマウンドを持つことの意味は、いかに大森町への眺め(大森町からの眺め)を確保するかという点を意識した造墓行為の現れと考えられるのである。

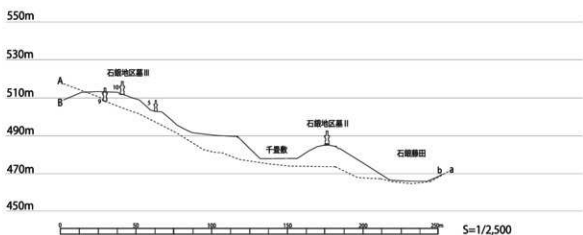
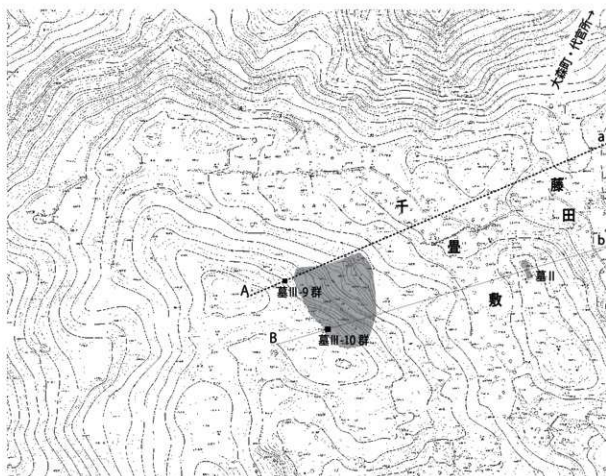
この「大森町への眺め」という視点は、石銀地区墓Ⅲでも当てはまる。墓Ⅲは千畳敷地区を見下ろす標高492～511mの北西向き斜面を階段状に造成して墓地としている。墓Ⅲには大型宝篋印塔に復元されるものが11基含まれるが、中でも9群-8・9は復元総高201cm、10群-1+3群-59は復元総高214cmの規模を持ち、下河原地区大安寺墓地にある推定大久保長安墓塔と同規模の高さをもっている。

墓Ⅲは現在竹林に覆われており、千畳敷地区さえも視認できないが、大森町を意識した立地であることが考えられる。墓群がこの位置より南側にずれていると墓Ⅱの丘陵が障壁となって大森町まで視認出来ないことから、これもよく考えられた墓の立地といえる。

墓Ⅱ・Ⅲともに福石鉱床の銀生産域の中核地に所在し、武家の墓とは考えられないことから、16世紀末～17世紀初頭に福石鉱床側で活躍した銀山師墓と想定される。

釜屋間歩近くの安原谷に所在する伝安原備中墓などを含め、17世紀初頭の有力銀山師墓と推測される大型宝篋印塔の選地・立地の特徴は、①銀生産域や居住域を見下ろす丘陵上又は頂上に近い斜面に立地する。②神社などの銀生産に関わる祭祀施設、支配施設からの見栄えを強く意識して墓の選地を行い、マウンド構築や籬壇の造営などの普請にも力を入れる。という2点に集約されるのではなからうか。

永久鉱床側における17世紀初頭の大形宝篋印塔の悉皆調査は着手したばかりであり、妙本寺上墓地や龍源寺間歩上墓地などの悉皆調査がさらに必要と考えられる。今後の調査の進展によっては本論の解釈とは異なる事象が現れるかもしれず、仮



第8図 仙ノ山 石銀地区の17世紀の墓地と生産・集落域の位置関係図

※宝篋印塔の縮尺は任意

- ◆石銀地区墓IIは、本谷と於虹ヶ谷の結節点に位置し、石銀藤田地区と石銀千畳敷地区を俯瞰することができる。また、大森町の代官所、城上神社、観世音寺なども視認できる。墓IIは、南北60m近くある丘陵頂部平坦面の最北部に3基近接して築造される。石見銀山遺跡では種であるが、ズリを盛ったマウンド上に組合せ宝篋印塔が造立されている。このような築造状況から石銀地区への俯瞰だけでなく、大森町からの視認性を強く意識した墓と考えられる。
- ◆石銀地区墓IIIは、石銀千畳敷地区を見下ろす位置に占地している。現在は竹林に覆われ視認性は不明であるが、樹木が無い状態であれば墓II同様、大森町への視界が確保されているかもしれない。なお、両墓地ともに休谷方面への視界は、手前の尾根にさえぎられて視認することができない。

説の域を出るものではない。ただ、17世紀初頭の銀山景観を復元していく上では、このような墓地に着目することも意義があると思われる。

#### ◆愛宕社の勸請

字甚光院の尾根頂上部に「愛宕社」が勸請されたことは既に述べてきたところであるが、その時期はいつ頃であろうか。

高橋伊武氏蔵の「石見銀山麓絵図」は寛政元(1789)年の書き込みがあることから、18世紀末頃の銀山町の様子を描いたものとして知られている。この「石見銀山麓絵図」は、銀山町に所在する中小の社まで細かく記入していることが特徴である。

この「麓絵図」には、出土谷の西福寺の左側山上に「アタゴ社」の注記と朱色の鳥居、社殿1棟が描かれている。(島根県教育委員会ほか 1999)

山根俊久氏による『石見銀山に関する研究』の付図「銀山町絵図」(野沢恒雄氏蔵)は、宅地の一部の地役人名(大住軍蔵、坂本清兵衛、田辺弥太郎、中山傳右衛門、田儀左衛門)が注記されており、18世紀前半の文政期に製作された絵図と考えられている。当絵図でも、出土谷の西福寺の左側山上に「アタゴ」の注記と鳥居が描かれている。また、出土谷から仙ノ山石銀地区に至る道から分岐して「アタゴ」に至る道も記入してある。(山根俊久 1932)

このように、現在まで確認されている絵図の状では寛政元(1789)年には、「愛宕社」が存在することは確認できる。

次に、愛宕社の石燈籠台座9に記された「石工福光村 坪内忠兵衛 同名甚七郎」の銘文に着目してみよう。福光村の石工・坪内氏の系譜や坪内家墓所の墓石などから、甚七郎は文化七(1810)年に68才で亡くなった事が知られる。忠兵衛は甚七郎の父親であり、大森町羅漢寺の五百羅漢製作の中心的石工であった初代平七の末弟で「増田屋」初代の人物でもある。(三谷1972)

忠兵衛・甚七郎父子で共作ができるのは、仮に甚七郎を忠兵衛25才時に誕生した子どもとすれば、甚七郎20～50才の時期、父の忠兵衛は45～75才の時期である。これは、1762～1792年に相当するが忠兵衛の没年が不明であるので下限は遡る可能性が高い。

そして、次に燈籠の願主であるが、「松原常右衛門」は山中家文書にある「石見銀山附地役人由緒書」の中にその名が見出される。「松原興四郎由緒書」の中で、興四郎の祖父・運平の項に付紙があり、こう記される。「享和二戌年差出候由緒書常右衛門与御座候得共、其後運平与改名仕候、依之下ッ札を以申上候」とあり、松原運平は「常右衛門」からの改名であることがわかる。

松原運平は、天明二年五月十五日に父伴蔵の跡を継いで、当初は中間として勤務をしている。文化八年には小頭役となり、文政九年に死没していることが由緒書からうかがえる。(島根県教育委員会 2005)

このことから、松原常右衛門が中間となった天明二(1782)年から、「常右衛門」を名乗ったことが確実な享和二(1802)年までの間が石燈籠の願主に成り得た年代であろう。

石燈籠の奉納が愛宕社の勸請新設に伴うと仮定してはあるが、絵図、石工、願主の三方面から石燈籠の奉納年を絞り込むと、松原常右衛門が中間となった1782年から「石見銀山麓絵図」の描かれた1789年の間に奉納された可能性がある。仮に1782年とすれば坪内甚七郎は40才、父の忠兵衛は60代と考えられる。

このように状況証拠からの仮定ではあるが、愛宕社石燈籠の寄進は1782年～1789年頃と考えられる。この燈籠寄進が愛宕社の勸請新設に伴うものではなく、以前から当地に存在していた愛宕社に対する寄進行為であれば、愛宕社の勸請された年は別途考えなければならないが、現状では手掛かりを欠いており今後の史料の発見や研究の進展を期待したい。

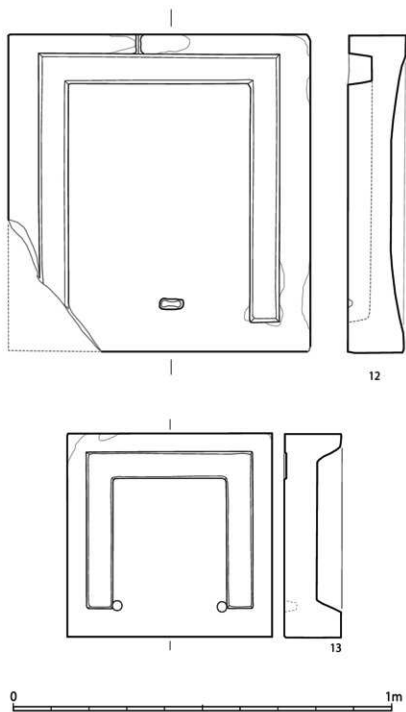
【参考文献】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町  
教育委員会・仁摩町教育委員会1999『石見銀山  
石見銀山遺跡総合調査報告書平成5年度～平成  
10年度第1冊〔遺跡の概要〕  
島根県教育委員会 2005「51.松原與四郎由緒書」  
『石見銀山歴史文獻調査報告書 石見銀山附地  
役人由緒書』

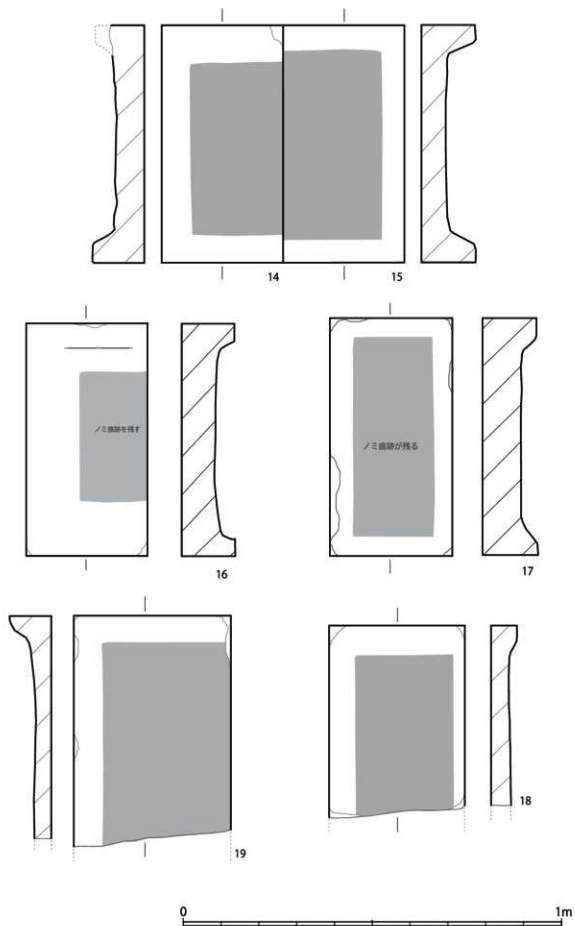
三谷 晃 1972「大森五百羅漢」『石見銀山叢話』  
山根俊久編 島根県文化財愛護協会  
山根俊久 1932『石見銀山遺跡に関する研究』  
石東文化研究会



第9図 字基光院尾根頂部の石造物実測図 S=1/10

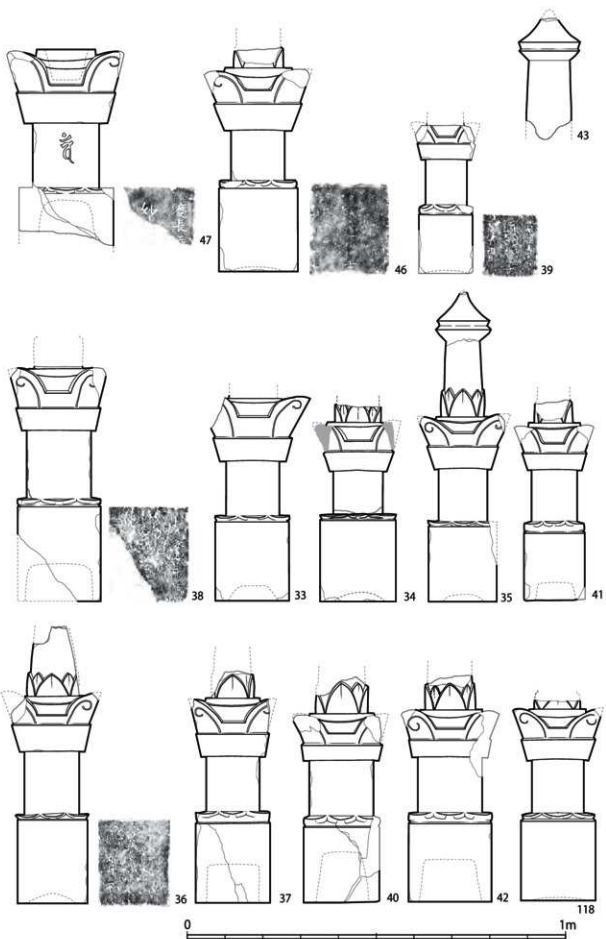


第10図 字基光院尾根頂部の石造物実測図2

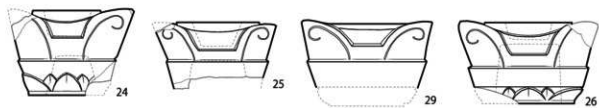
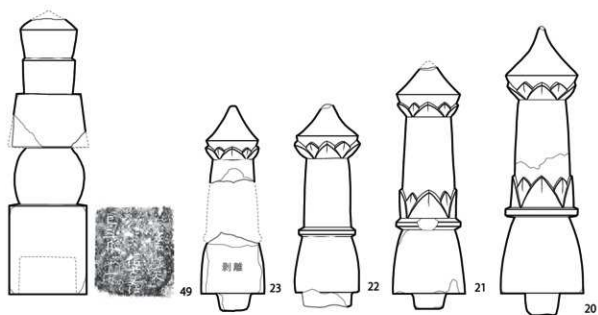
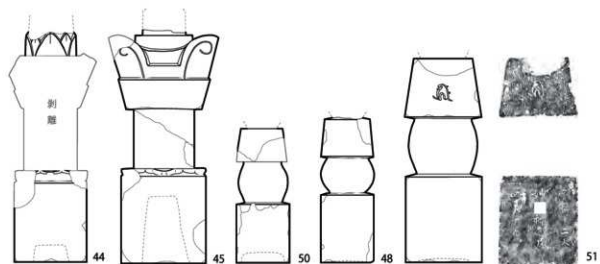


第11図 字基光院尾根頂部の石造物実測図 3 S=1/10

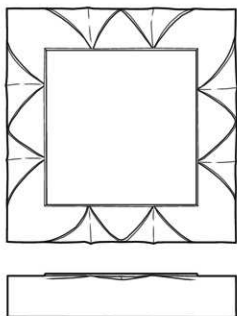




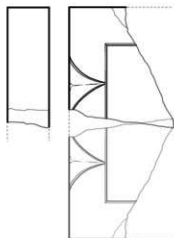
第12図 字基光院東側尾根の石造物実測図1 S=1/10



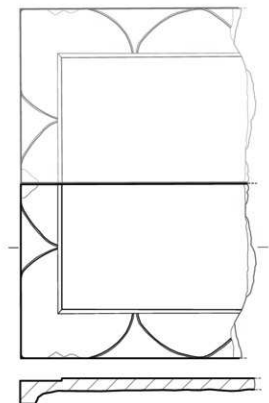
第13図 字基光院東側尾根の石造物実測図2 S=1/10



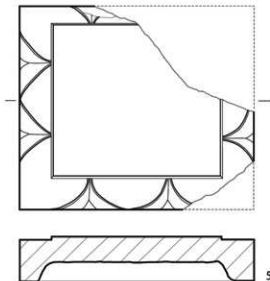
31



32



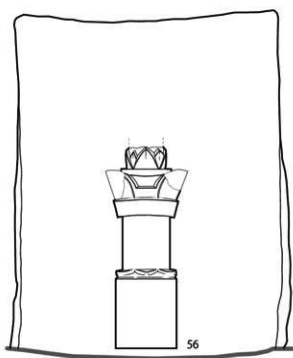
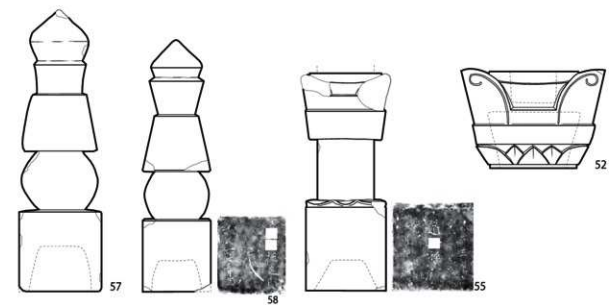
54



53



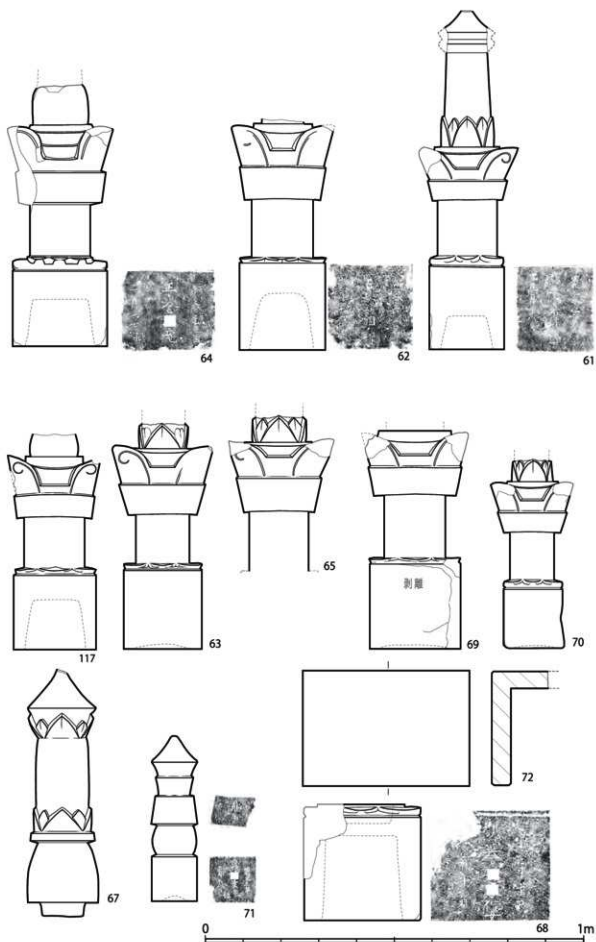
第14図 字基光院東側尾根の石造物実測図3 S=1/10



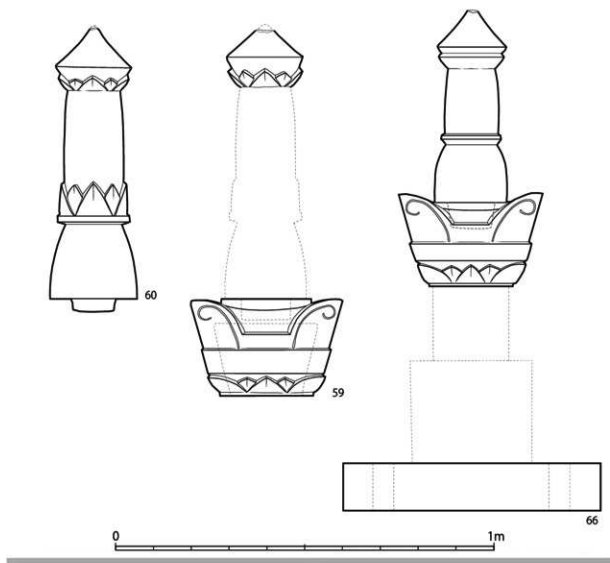
3号石版



第15図 字基光院東側尾根の石造物4及び3号岩窟実測図 S=1/10

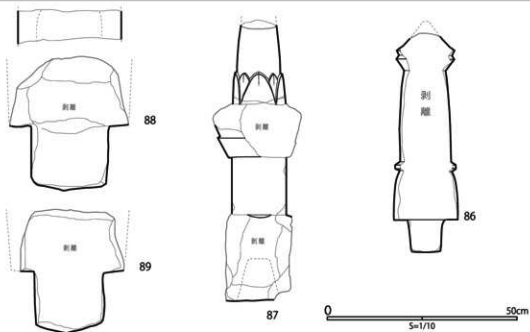
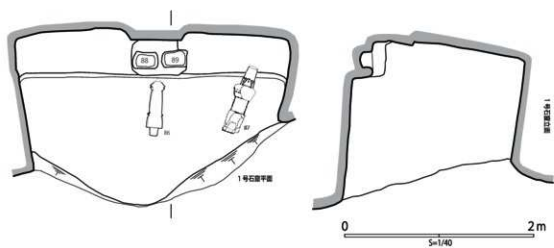


第16図 字基光院西・北側斜面の石造物実測図1 S=1/10



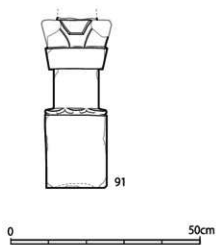
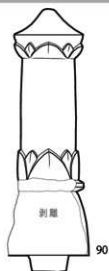
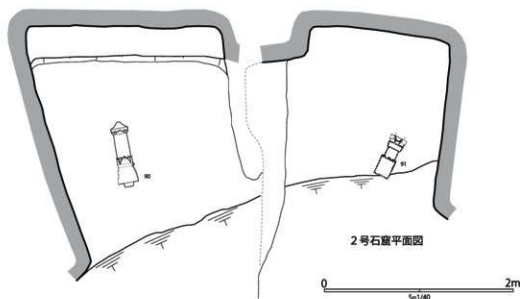
※区割図の縮尺は任意

第17図 字基光院西・北側斜面の石造物実測図2及び区割図 S=1/10



1号岩窟外觀

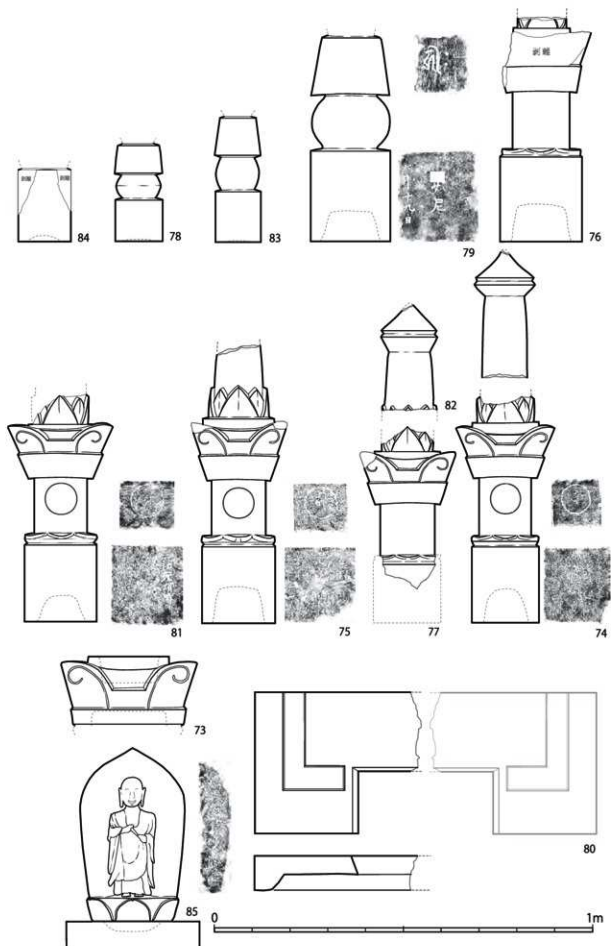
第18図 字基光院1号岩窟実測図及び石造物実測図 S=1/40・1/10



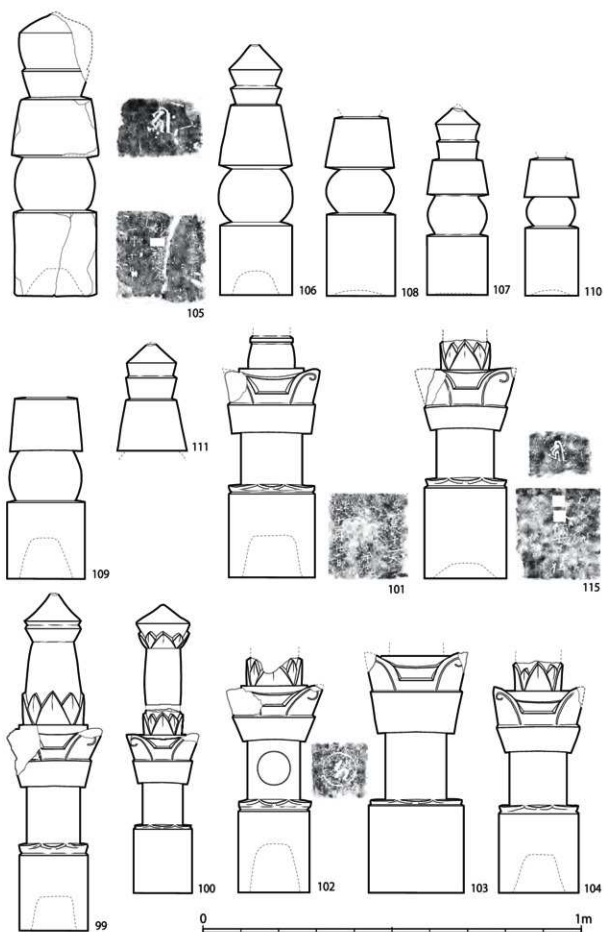
2号岩窟外觀

第19図 字基光院2号岩窟実測図及び石造物実測図 S=1/40・1/10

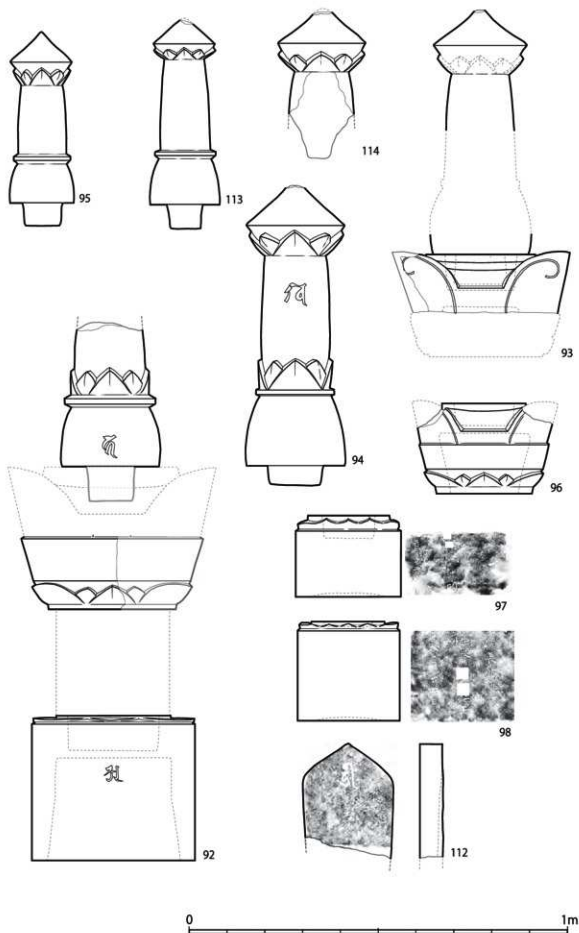




第20図 字基院西側斜面下段の石造物実測図 S=1/10



第21図 字基光院南側斜面の石造物実測図 1 S=1/10



第22図 字基光院南側斜面の石造物実測図 2 S=1/10

## 附編 1. 高橋家裏の石造物

### 調査の目的と経緯

石見銀山遺跡内の治山事業として、島根県農林水産部森林整備課が落石対策工事を実施予定としている市道銀山線（高橋家裏）について、石造物の分布調査を実施したところ、要害山中腹の標高237～240m付近の尾根上に数基の石造物が存在することが判明した。石見銀山遺跡では、平成9～16年度にかけて石造物分布調査を実施しているが当該地については未踏査地区であったため、新発見の石造物である。

当地は高橋家（島根県指定史跡 石見銀山御料銀山町年寄山組頭遺宅高橋家）の後背斜面にあたり、落石対策事業の範囲にあたることから石造物悉皆調査を実施した。

調査地は大田市大森町ホ279大谷屋山、同ホ275大谷下モ居宅上エである。

### 調査の概要

標高237～240m付近の尾根上に緩傾斜の平坦面を造作している地点に6基の石造物が存在していた。また、高橋家西側の谷川中（標高212m付近）に上方から転落してきたと思われる宝篋印塔笠部が1基確認された。これらは何れも造立当初の位置を保っている可能性は低い、周囲に平坦地も無いことから、この平坦面内に造墓されていたものと考えられる。

宝篋印塔1は、谷川に転落していた笠部1-1と尾根上に残っていた基礎1-2を図上で復元したものである。相輪部は確認できなかったが推定総高135cm前後と考えられる。「元〇巳」の紀年銘があることから、元和三(1617)年の造立と推定され、当墓域の造営年代を知る手掛かりとなる。

墓石2～6は、尾根線線上の標高237～240m付近に設けられた加工段の同一平坦面内に残存していた。何れも基礎部分であり、塔身や笠部は確認できていない。2は上面端部に硬化した蓮弁表現

を施す宝篋印塔基礎部である。3は上面四辺端部を面取り加工した無縫塔基礎と考えられ、上面中央には直径10.5cmの円形柄穴がある。4～6は逆円錐台形を呈し、周囲に請花を施した基礎で、やはり無縫塔に伴うものと考えられ、上面中央には直径13.5～14.5cmの円形柄穴が設けられる。最大幅は33～35.5cm、高さ19.5～21.5cmと寸法は微妙な違いが見られる。また、蓮弁の幅、基部の状況、形状についても三者間で微妙に違いがある。

### まとめ

当該地では、宝篋印塔2基、無縫塔基礎4基分の石材が確認された。造立された時期は、墓石形式や紀年銘などから17世紀前半と推定される。

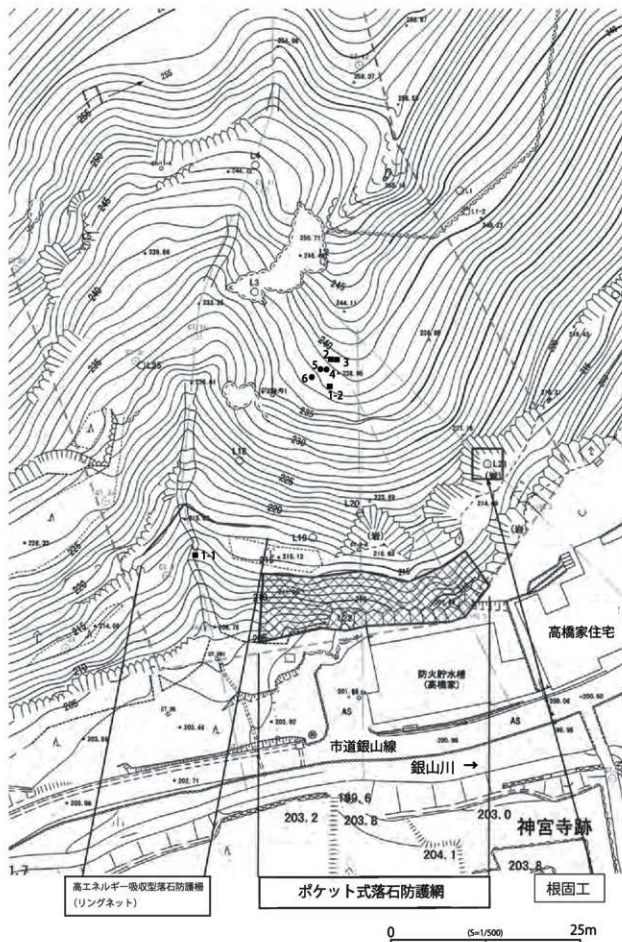
宝篋印塔は、墓誌から僧侶墓と考えられ、無縫塔4基の存在を考慮すれば当該墓域は、僧侶墓地と考えられる。

この墓群に葬られた僧侶がどこの寺僧であったのか特定する手掛かりは少ないが、宝篋印塔1-2に記された「道誉七業〇和尚」という戒名からみれば浄土宗寺院の関係者とみなせる可能性がある。

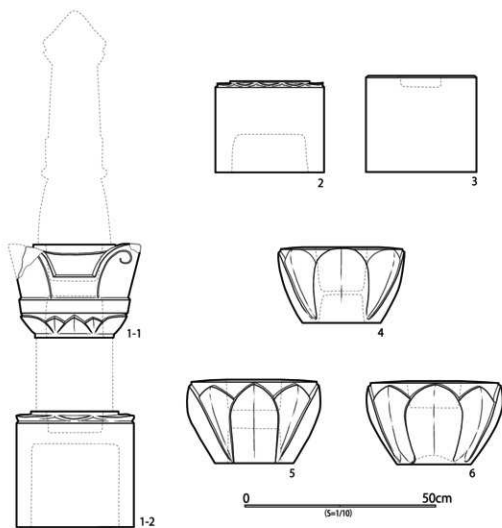
この墓群では、塔身が見つかっていないことから、何時の時点かに墓が移転され、基礎部分のみが残されたと考えられる。17世紀後半以降の造墓が見られないことから17世紀前半（元和～寛永期か）にのみ造墓された墓群といえよう。

尾根中腹の僅かな平坦面を充填するような造墓であり、周囲は急斜面に取り囲まれているため、もとより大規模な墓群の設定は困難である。

この墓群の性格は、①17世紀前半の造営、②山吹城の支配機能の移転直後の土地利用、という点からみれば、山吹城山頂主郭へ登坂可能な尾根筋の道を視覚的・心理的に遮蔽する意味合いを想定できるかもしれない。今後の類例調査の進展を期待したい。



第23図 大谷地区高橋家裏の石造物群位置図 S=1/500



高橋家裏の石造物の現況

第24図 大谷地区高橋家裏の石造物実測図 S=1/10

## 附編 2. 清水谷地区本法寺跡 門脇家墓所の石造物

### 調査の目的と経緯

平成24年度に清水谷地区の近代化遺産の分布調査実施中に本法寺跡、蓮花寺跡などに多数の石造物が存在するのを確認した。当地周辺は、2000年5月30日に石造物分布調査が行われ、その成果として、当地には141基の石造物が存在することが既に報告されているが、詳細についての検討は未着手であった。(島根県・大田市2005)

日蓮宗久遠山本法寺は、寺伝によれば天正二(1574)年に日顕上人によって清水谷に創建されたとされる。江戸時代には銀山町の日蓮宗五ヶ寺として繁栄したが、大正中期～昭和初期には無住になり荒廃した。昭和8年には須加山本法寺として埼玉県行田市に移転して今日に至っている。清水谷の本法寺跡には、壮大な石垣を伴った旧境内地や題目塔などが現存している。(三瓶古文書を読もう会1995)

本法寺境内跡の北西尾根上に墓群が展開しているが、その一角に門脇家墓所が存在する。墓所は尾根の稜線を挟んで東側に18世紀代の東群墓所(標高203～205m)があり、尾根の西側に19世紀代の西群墓所(標高203～204m)が展開している。

今回報告するものは東群(1～7)7基、西群(8～14)7基の計14基であるが、破砕して細片化している墓石がさらに2基以上あることから本来は20基近い墓石が存在した可能性もある。

このように門脇家墓所はある程度のまとまりがある一族墓であり、かつ墓碑などの読み取りから石見銀山の一町役人の系譜を追える可能性がうかがわれた。また、『石州銀山治府要集』、『石州大森銀山諸書物写』などに記載される人物の墓石が含まれるなど、銀山町役人研究に寄与できることが想定されたため調査を実施した。(島根教育委員会2010、2012)

調査地は大田市大森町ホ228-3清水谷寺ノ上エ、同ホ228-4清水谷寺ノ上エである。

### 調査の概要

本法寺西側の丘陵地に墓地は展開している。標高203～205m付近の尾根上に、等高線に沿って狭長な平坦面を造作している。

本法寺境内に面する東群墓地は、標高203m付近に長さ約12mほどの平坦面を造成し、6基の墓を設け、更にその上方に長さ5m程の上段平坦面を造成し、2基前後の墓を設置している。東群墓地の墓石は全て原位置に近い場所で転倒していた。

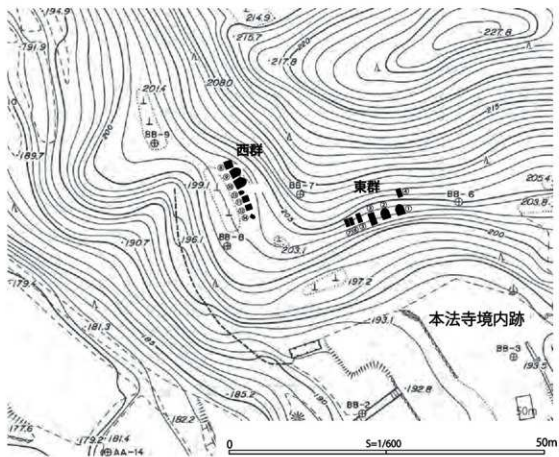
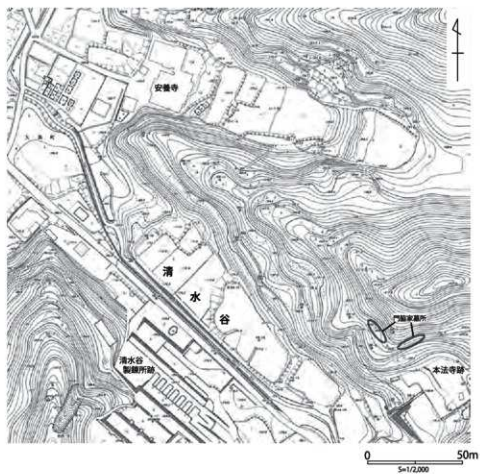
尾根を挟んで西側には、清水谷製錬所跡側に面して西群墓地が展開している。標高203m付近に長さ12mほどの平坦面を東西に造成し、8基前後の墓を造営している。西群墓地の墓石は、⑧、⑩、⑪が原位置で樹立されたまま残っていたが、それ以外は原位置付近で転倒していた。

東群・西群墓地ともに、下方の平坦面には他家の墓域が展開しているが、門脇家墓地より上方の斜面には他家の墓地は所在していない。

東群墓地下段は、奥(北東)側から、初代門脇用庵、初代門脇用庵妻、門脇太兵衛、門脇要助母、門脇弥兵衛妻、門脇松太子の順に墓石があり、上段では門脇虎次郎、名不詳の墓石がある。

このうち、初代用庵と用庵妻の墓石は嘉永六年に門脇内蔵治が再建した墓石である。紀年銘によると、初代用庵と用庵妻は正徳元(1711)年と享保十一(1726)年にそれぞれ没しており、本来は位牌形墓標として墓石が造られていたものと推定されるが、再建時には幕末期に流行していた自然石による墓石が採用されている。

2代目と推定される門脇太兵衛と、太兵衛の孫に相当する世代の門脇虎次郎の墓は円頂六角形墓



第25図 清水谷地区本法寺跡門家墓所位置図及び墓石配置図 S=1/2,000・1/600



標が採用されている。門脇太兵衛は宝暦五(1755)年に没しており墓石には、流行し始めたばかりの円頂六角形墓標をいち早く採用している。

5～7の墓石は、円頂方柱墓標と円頂方形墓標であるが、何れも正面に五輪塔を線刻し、その内側に法号が記されている。

西群墓地は、西から門脇茂七、門脇茂七妻、門脇内藏治、門脇格造次女、門脇茂十良、門脇茂十良妻、門脇格造長女の順に造営されているが、途中で細片化した墓石も見られる。

門脇茂七は『石州大森銀山諸書物写』「銀山師苗字旅帯刀の儀御尋ニ付書付申上候」に「町組頭」末席に名が見える。この文書が文化・文政期～天保七年頃とされるので19世紀前半に銀山町役人を務めたことがわかる。茂七の墓石は、円頂方柱墓標であるが、高さ74.5cmと大型である。茂七は天保十四(1843)年、茂七妻は嘉永四(1851)年に亡くなっているが両者の墓を造立したのは孫の門脇内藏治であると銘文に記されている。

次に門脇内藏治の墓であるが、高さ92.5cmの自然石を用いた墓石で、墓碑面は極めて平滑に研磨され丁寧に仕上げられている。墓碑の総文字数は69字を刻んであり、墓主の業績顕彰を色濃く打ち出すなど、門脇家墓所の中でも一際異彩を放っている存在である。

門脇内藏治は『石州銀山治府要集』「銀山々町役人并銀吹清吹師名前之事」(万延元年)で「定使」として記載されている。また、清水寺文書6「来子ら西迄拾ヶ年賦御拝借金仮証文之事」(文久三年)、同19「乍恐以書付奉願上候」(安政六年)、長楽寺文書65「当戊ら来亥迄式ヶ年季渡申細証文之事」(文久二年)などの文書でも「定使」として記載されている。碑文には天保八年～安政三年の20年間「町組頭」を務め、さらに安政三年から死没する慶応二年まで11年間「定使」を務めたと記しており、文書に現れる役職と在職期間が合致していることがわかる。(島根県教育委員会2011)

11と12は門脇内藏治の父・門脇茂十良の墓とその妻の墓であり、ともに円頂方形墓標である。茂十郎は慶応四年、その妻は明治9年に亡くなっているが、妻の墓は高さで3.5cm、幅で1.5cmほど茂十良の墓より小さく作ってある。

13と14は、明治8年・同26年に没した門脇格造の二人の娘の墓で、ともに自然石墓標である。

## まとめ

当地では、円頂六角形墓標2基、円頂方形墓標3基、円頂方柱墓標3基、自然石墓標6基の計14基を実測調査した。

周辺には17世紀前半に造立されたとみられる組合せ宝篋印塔の部材も散乱しているため、本法寺墓地の造墓開始は17世紀初頭まで遡るものと推定される。

門脇家墓所については、初代門脇用庵夫妻の墓石紀年銘を正しいものとすれば、正徳元(1711)年からの造墓開始となる。初代の墓は当初、「位牌型墓標」として作られたものと推定できるが、140年余りの年月の中で破損したのか、嘉永六年になって門脇内藏治が再建している。

初代・門脇用庵は17世紀後半～1711年、二代と推定される門脇太兵衛(1687～1755)は18世紀前半に活躍したものと推定されるが、当該期の史料上の制約から確認できてはいない。17～18世紀代の門脇家がどのような職についていたのか判然としないが、銀山町内でそれなりの地位にいたことが類推される。

18世紀後半に門脇家当主になった茂七は、石見銀山領刺鹿村(現大田市久手町刺鹿)の地方三役を担った和田家から門脇家に養子に入っている。文化十一(1814)年及び文政二(1819)年の佐毘売山神社本殿拝殿奉造棟札に記載される町組頭(各20名、17名)の筆頭に名があることから文政年間には銀山町組頭であったことが確認できる。現時点で門脇氏の町役人就任は19世紀初頭段階から確認できることになる。(渡辺1941、大田市教

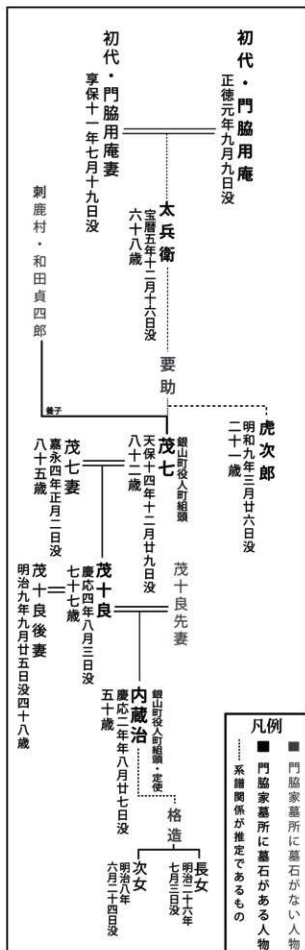
育委員会2013)

そして、天保八年から町組頭を務めた門脇内蔵治は、初代夫妻墓ばかりでなく、祖父茂七夫妻墓の造営まで行っている。内蔵治の父である茂十郎は慶応四年に77才で没していることから、息子である内蔵治より長命であったにも関わらず父母の墓造営には関与が見えない。

墓碑からみると、門脇内蔵治は20才から既に「町組頭」を務め、40才からは「定使」を務めたことが窺える。内蔵治が20才の時には、祖父の茂七も健在であることから、門脇家の当主が茂七→茂十良→内蔵治と順序通りに推移したとしても、茂十良が家長として活躍した期間は短いものと推察される。それが、茂七夫妻墓の造営においても現れているものと考えられる。

茂十良が健在であるにも関わらず、子息の内蔵治が二十歳から出仕して「町組頭」を務めなければならなかった理由は定かではないが、茂十良が病弱であって公務に耐えられなかったなどの可能性が考えられる。

また、逆に二十歳から「町組頭」の役職を20年間務めた内蔵治は、町役人として頭角を現したと見え、門脇家では初めて「定使」まで務めるなど出世した様子が認められる。「定使」は、銀山町の五役職の一つで、大森町の「目代」と同様な動向で、「年寄」を補佐し、銀山町の宗門改、家数人別の取り調べを行う役職であり、銀山町の民政において年寄に次ぐ重席である。(和田2008) 銀山町役人としては、新興といえる門脇家中興の人として、初代夫妻墓の再建などの事業を行ったものと推察できるが、今後の史料の増加を待って総合的に判断されるべきであろう。石造物調査から言及できることは限定的であるが、今後の調査研究の進展に期待したい。

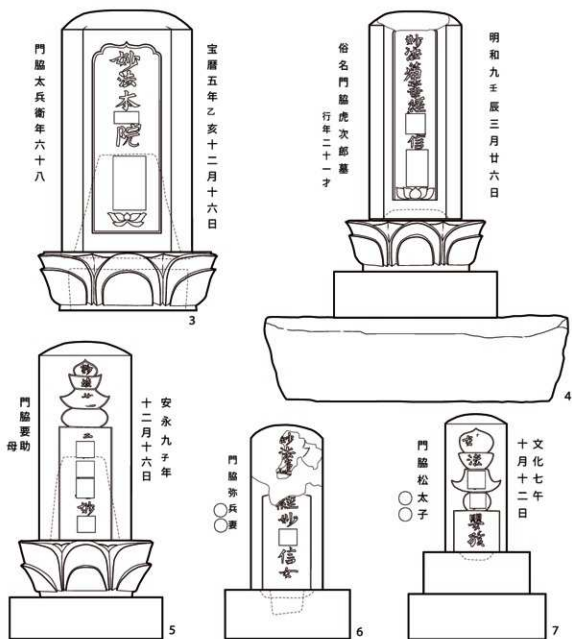


第26図 門脇家推定系譜 (墓誌・紀年銘から作成)

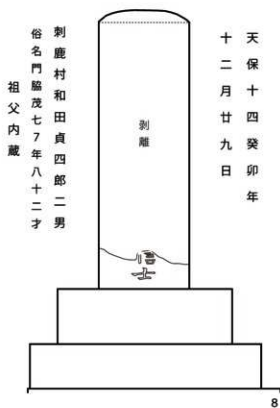
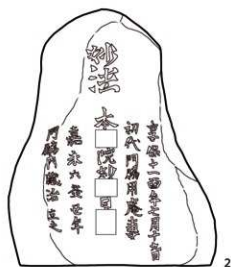
参考文献

- 大田市教育委員会 2013『史跡石見銀山地内建造物（10社寺）調査報告書』  
 三瓶古文書を読もう会 1995『須加山（旧久遠山）本法寺』『石見銀山百か寺』  
 島根県教育委員会 2010『石見銀山歴史文獻調査報告書Ⅴ 石州銀山治府要集』  
 島根県教育委員会 2011『石見銀山歴史文獻調査報告書Ⅵ 石見銀山関連史料目録Ⅰ』

- 島根県教育委員会 2012『石見銀山歴史文獻調査報告書Ⅶ 石州大森銀山諸書物写』  
 渡辺建巖 1940『久手町郷土史』  
 和田美幸 2008『江戸時代鉾山町の特質』『たたら製鉄・石見銀山と地域社会—近世近代の中国地方—』相良英輔先生退職記念論文集刊行会

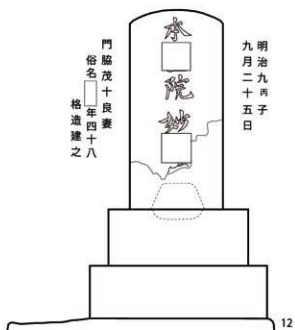
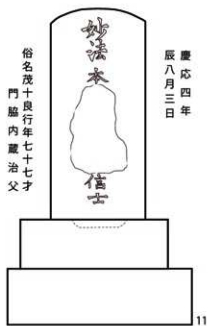


第27図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図1 S=1/10



0 1m

第28図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図2 S-1/10



0 1m

第29図 清水谷地区本法寺跡門脇家墓所の石造物実測図3 S-1/10

## 附編 3. 下河原天満宮跡の石造物

### 調査の目的と経緯

平成25年10月13日に石見銀山遺跡の普及活用事業の一環として、体験プログラム「おおだまるごとみちくさ日和 石・見る石見銀山」を実施した。開催に先立って下河原地区にある「佐和華谷碑」を見学した際、付近に燈籠などの石造物が散布していることを確認した。

当該地は、大田市大森町ホ191-1字天満社であり、江戸時代には「天満宮（天神社）」が鎮座したことが知られている。

当地周辺は、平成9年～平成16年度に実施された石造物分布調査の対象範囲外であったため、石造物の存在は十分に周知されたものではなかった。しかし、当地周辺は、蔵泉寺口番所推定地にも近く、近接する旧大住家地点、渡辺家地点、大賀家地点では発掘調査も実施されているなど調査研究の蓄積がある地域でもある。（大田市教育委員会2013）

観光客など人の往来も多く、銀山町への入口として人目につく場所に所在する石造物について、今後の整備活用に備えるため、あるいは石造物の保護のためにも資料化が必要と考えられたので悉皆調査を実施した。

なお、銀山町内には休谷の清水寺（旧宝珠寺）裏手と佐里光山神社の境内社として「天満宮」が所在することから、ここで紹介する「天満宮」は、地名をとって「下河原天満宮」と仮称する。

### 調査の概要

天満宮跡の平場は、南側を水路、北側を山によって遮られた平面三角形の形状を呈しており、標高は約135mである。東西は約15m、東端部での奥行きは約7mほどの広さである。

山手の1段高い地点に、漢儒学者「佐和華谷」碑が樹立されている。当碑は天保11年2月に起工し、翌12年8月に完成したもので、高さ約2.7m

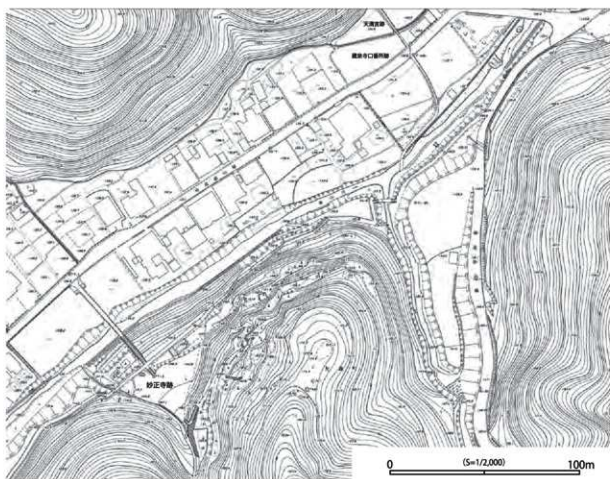
の巨大なものである。佐和碑の手前にある碑造立の経緯を記した六角碑には「…議郷人建此菅廟之陸焉…」と記されており、天満宮境内に設置されたことがわかる。（谷口廻淵1940）

今回紹介する石造物として、平面三角形の平場の南端部に燈籠①と③、東北端部に燈籠②、西端部に鳥居が確認された。何れも平坦地の端に片付けられた状態で無造作に置かれているものである。

燈籠1と2は一對となるものであるが、「竿」と「笠」部分しか残存していない。竿は、中台を載せる部分が若干広く、中位は窄まったのち、裾に向かって緩やかに弧線を描いて広がっており、中位の紋りは櫛かであるが「神前型燈籠」に区別できる。底部には、柄状の造り出しを設けており、基礎石に柄を埋め込んで固定する仕様になっている。竿正面には天満宮の神紋である梅鉢紋様を陽刻し、その下に「御神燈」の文字を刻む。側面には、奉納年月日と思われる「宝曆六丙〇月廿五日」と、願主として①「濱〇〇〇」、②「丹羽英茂」が刻まれる。

燈籠3も「竿」部分と「中台」部分しか残存していない。本来一對で奉納されたものか、燈籠1・2の破損により1基だけ奉納されたものかは不明である。竿の下半部は直線状に開き、下端部は平坦に仕上げているため、台座に乗せるだけの設置仕様であることがわかる。竿正面は破損により、紋様・文字の状況が確認できないが、側面には「文政十〇」、「願主 田〇〇〇、植野〇〇、河野〇〇、田〇〇〇」と奉納年月日と願主名が刻まれている。

鳥居は、福光石製で島木と一体化した笠木が残存している。本来は二石を中央で繋いで一本の笠木としてものであるが、左側しか残存していない。現在の長さは1.55m程であるが、復元長は3.15m程度である。柱が残存しないため奉納年月

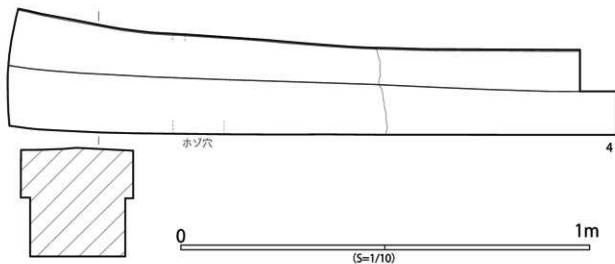
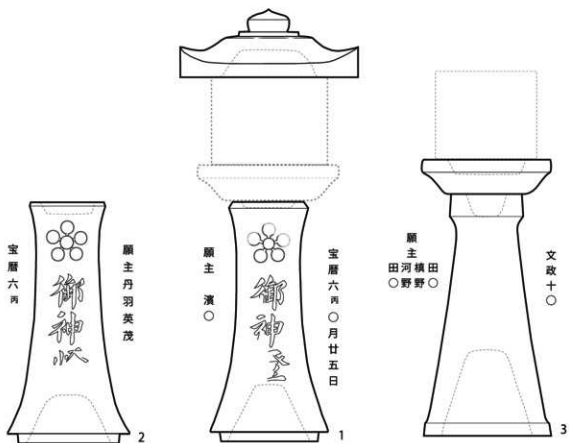


下河原地区周辺地形図 (S=1/2,000)

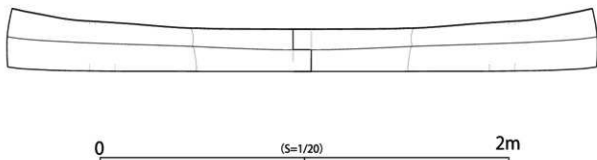


下河原天満宮周辺及び石造物分布図 (S=1/500)

第30図 下河原地区周辺地形図及び地下河原天満宮跡石造物配置図 S=1/2,000・1/500



鳥居笠木の全容推定図



第31図 下河原天満宮跡の石造物実測図 S=1/10・1/20



日などが不明であるが、大森町・銀山町で福光石製鳥居は稀少な存在と言える。

## まとめ

下河原天満宮跡に所在する石造物の調査結果と関連して、①天満宮の創建年代、②燈籠の寄進者、の二点が注目される。

## 創建年代について

下河原天満宮について、その創建年代を特定するような史料・資料は知られていない。

高橋伊武氏蔵の「石見銀山麓絵図」は寛政(1789)元年の書き込みがあることから、18世紀末頃の銀山町の様子を描いたものとして知られている。この「石見銀山麓絵図」は、大谷・柳畑谷の狭い範囲に所在する4つの稲荷社を丁寧に記載するなど、銀山町に所在する中小の社まで細かく記入していることが特徴である。

この「麓絵図」の蔵泉寺口番所付近には天満宮の記載がない。(島根県教育委員会ほか 1999)

山根俊久氏による『石見銀山に関する研究』の付図「銀山町絵図」(野沢恒雄氏蔵)は、宅地に一部の地役人名(大住軍蔵、坂本清兵衛、田辺弥太郎、中山傳右衛門、田儀左衛門)が注記されており、18世紀前半の文政期に製作された絵図と考えられている。当絵図には蔵泉寺口番所付近に「天神」の記載がみられ、鳥居や社殿が描かれている。(山根俊久 1978)

また、先述したように「佐和華谷碑」に附属する「六角碑」には、普廟のほとりに碑を建立したことが記されるため、天保十二年に天満宮が存在したことも明らかである。

これらの史料、金石文から、下河原天満宮は寛政元年段階では当地に無く、それ以後文政年間までに創建されたものと考えられてきた。

しかし、今回「宝暦六年」(1756年)に寄進された燈籠が確認されたことは、下河原天満宮の造営年代に二つの可能性を提示したことになる。

一つは、神社描写の丁寧な「麓絵図」の段階(1789年)には当地に天満宮は無く、それ以後にどこかからか「宝暦六年」銘の燈籠を伴って天満宮が移転して来た可能性である。

二つめは、少なくとも宝暦六年には、下河原天満宮が現在地にあったが、「麓絵図」にはなんらかの理由で書かれなかった可能性である。

現時点ではどちらも判断できるものではないが、蔵泉寺口から銀山町に入ったばかりの場所という立地の特性から、支配者である武士側から重要視された神社といえるのではなからうか。

## 燈籠の寄進者

「宝暦六年」に燈籠を寄進した人物である「濱〇〇〇」、「丹羽英茂」については、宝暦二年の石見銀山附役人同心中間のリストにはその名が見られない。その前後の時代でも「丹羽」「濱〇」姓の地役人は見いだせないことから、彼らは地役人ではないと考えられる。(仲野1990)

大森陣屋地方役所の手付・手代などの可能性が考えられるが定かではない。宝暦六年時の代官は浅岡彦四郎胤直であるので、この関係から検討できる可能性もある。

「文政十年」(1827)に燈籠を寄進した「田〇」「植野」「河野」「田〇」については、『銀山要集』所収の文政四(1821)年銀山附役人席順が参考になる。(島根県1965)

そこに列記される地役人名のなかで、「植野治兵衛」「河野長平」は、燈籠に名を記された当人である可能性が高く、冒頭の「田〇」は「田中八郎太」もしくは「田辺弥太郎」、末尾の「田〇」は「田辺彦三郎」に比定できる。燈籠奉納年との年代差が六年あるため、その間に代替わりしている可能性もあるが大きな齟齬はないであろう。

## 下河原天満宮の意義

燈籠1・2は、規模は大きくはないものの、神紋の陽刻など細部の製作技巧には見るべきものが

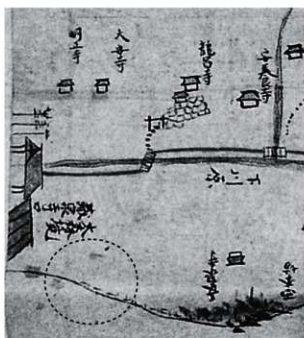
あり、燈籠の寄進者である「丹羽英茂」、「濱○○○」がいかなる人物であったのか注目される。天満宮には文政十年に銀山附役人4名により追加の燈籠が寄進され、天保十二年には「佐和華谷碑」が造立されるなど、天満宮に対する武士層や漢儒学者など知識人の信仰が厚かったことがうかがわれる。

野沢家文書の「銀山町絵図」に描かれる銀山町の神社で両部鳥居（親柱を前後の子柱で支える）形式の鳥居が描かれるのは、佐毘売山神社と下河原天満宮のみである。この点を重視すれば、下河原天満宮は銀山町内で、佐毘売山神社に次ぐ位置付けの神社と言っても過言ではないかもしれない。

銀山町入口に立地し、佐毘売山神社や稲荷社ほど鉱山生産祈願の色合いが濃くない天満宮の果たした役割について、ここで言及することは叶わないが、これを期に石見銀山内の神社研究が進展することを期待したい。

#### 【参考文献】

- 大田市教育委員会 2013『石見銀山遺跡発掘調査発掘調査報告書Ⅲ』  
 谷口廻潤 1940『島根備林伝』谷口廻潤先生還暦記念刊行会  
 島根県1965『新修島根県史 史料篇（三）近世（下）』『銀山要集・銀山旧記』  
 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書第1冊 遺跡の概要』  
 「銀山の争奪と支配」  
 仲野義文 1990「石見銀山附地役人についての一考察」『日本海地域史研究』第11輯 日本海地域史研究会  
 山根俊久 1932『石見銀山に関する研究』石東文化研究会（臨泉書店復刻 1978）



寛政元（1789）年頃の蔵泉寺口番所付近  
『石見銀山鹿絵図』部分（高橋家文書）に追記



文政年間頃の蔵泉寺口番所付近  
『銀山町絵図』部分（野沢家文書）に追記

第32図『石見銀山鹿絵図』と『銀山町絵図』の蔵泉寺口番所付近の比較図

## 高橋家裏調査区の石造物

第23回	第23回	第23回	第23回	第23回	第23回	第23回	棟号番号
							整理番号
6	5	4	3	2	1		報告番号
無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	組合玉置印塔	組合玉置印塔		種別
21.5	21.5	19.5	25.5	24.0			全高
35.5	35.0	33.0	29.0	28.5	(35.0)		最大幅
						元和〇巳 運慶七実〇和興 二月三日	銘文
側面全体に講花が施される。	逆円錐台形の台座のみ。 側面全体に講花が施される。	逆円錐台形の台座のみ。 側面全体に講花が施される。	逆円錐台形の台座のみ。 高さの比率は0・88	上面には直径10・5cmの円孔がある。幅に対する高さの比率は0・84	基礎のみ。幅に対する高さの比率は0・84	立部・基礎のみ残存。基礎は幅に対する高さの比率が0・98	備考
					1617		西暦
尾根上	尾根上	尾根上	尾根上	尾根上	谷川内・尾根上		所在

## 下河原天満宮跡の石造物

第29回	第29回	第29回	第29回	棟号番号
				整理番号
4	3	2	1	報告番号
鳥居	燈籠	燈籠	燈籠	種別
30.5	67.0	63.5	64.0	全高
155.5	35.0	31.0	32.0	最大幅
	文政〇〇 願主 田〔 〕 横野〔 〕 田〔 〕	御神燈 願主 清〔 〕	願主 丹羽兼茂 御神燈 宝暦六丙〔 〕	銘文
鳥木と一体になった立木のみ。二石組合わせて構成されるものの片側である。石材は福光石製。	羊部分と中台のみ残存。中台は高さ9・5cm。幅35・5cm。	羊部分と中台のみ残存。1と対になる。羊の中央部は高形に穴を掘り、御神燈に分類される。竪は高さ18cm。幅47cmで頂部に宝珠を載せる。	羊部分と立部のみ残存。1と対になる。羊の中央部は高形に穴を掘り、御神燈に分類される。竪は高さ18cm。幅47cmで頂部に宝珠を載せる。	備考
	1827	1756	1756	西暦
下河原天満宮跡	下河原天満宮跡	下河原天満宮跡	下河原天満宮跡	所在

本法寺跡 門脇家墓所の石造物

第26図	第27図	第27図	第27図	第27図	第27図	第26図	第26図	拝図番号	
								整理番号	
8	7	6	5	4	3	2	1	報告番号	
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	六角形墓標	六角形墓標	自然石	自然石	種別	
74.5	36.5	44.0	52.5	55.5	64.5	68.5	91.0	全高	
24.5	16.0	19.0	24.0	24.0	34.0	55.0	50.0	最大幅	
天保十四癸卯年 十二月廿九日(信士) 村賀村和田良四郎(男) 俗名門脇七兵衛(十二才) 社父内藏	文化七年 十月十二日 妙法(男)○信女 門脇松太子 ○○○	妙法蓮華経○信女 門脇弥兵衛 ○○○	安永九九年 十二月十六日 妙法蓮華経○○○ 門脇賢助 母	明和九年三月廿六日 妙法蓮華経○○○ 俗名門脇成次郎墓 行年二十一才	宝曆五年十月十六日 妙法(本)○(男)○ 門脇太兵衛年六十八	享保十一年七月十九日 初代門脇内藏妻 本○院妙(日)○ 萬永六癸丑年 門脇内藏治立之	正徳元年九月九日 初代門脇内藏墓 妙法(本)○(男)○ 萬永六癸丑年 門脇内藏治立之		銘文
切石台座を含めた高さは 100・5 cm	切石台座を含めた高さは 59・5 cm	底部に枿を持ち、切石台 座を含めると高さ57 cm	蓮花付台座と切石墓壇を 合わせると高さ79 cm	蓮花付台座と墓壇を合わ せると高さ104 cm	蓮花付台座を含めると高 さ80 cm、さらに墓壇石 が附属している。	底部には枿はない。墓壇面 は平滑であるが、端部は 未加工である。	底部に枿を設ける。墓壇 面は平滑であるが、表面は 未加工。	備考	
1843	1810	18世紀前半	1780	1772	1755	1853年再建	1853年再建	西暦	
本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	所在	

第27図	第27図	第27図	第27図	第27図	第26図	拝図番号	
						整理番号	
14	13	12	11	10	9	報告番号	
自然石	自然石	円頂方形墓標	円頂方形墓標	自然石	自然石	種別	
61.0以上	44.0	53.0	56.5	92.5	87.5	全高	
42.5	27.0	24.5	25.0	52.5	60.5	最大幅	
父門脇格造長女 己未三月三日	門脇○女仲室 明治○年 明治八年奉 六月二十四日 門脇格造子	○○神堂 明治八年奉 九月十五日 本○院妙(日)○ 俗名十良妻 明治十八年四月十八 格造建之	慶応四年 八月三日 妙法本(一)信士 俗名及十良行年七十七才 門脇内藏治父	慶応四年 八月廿七日 俗名門脇内藏治 行年五十歳 本○院○信士 ○院○信士 一天供之能町相讓使可 慶応二年庚午十一月朔日 使勤役	辛酉永四年 底三石二日 本○院妙(日)○信女 門脇七妻○○○ 八十五才 大○村乙意武石上門 門脇内藏治立之		銘文
厚さ13 cm	厚さ15 cm	82 cm	切石台座を含めると高さ 84・5 cm	自然石台座を加えると高 さ117 cm、墓壇面はT 字に平滑に加工される。 厚さ22 cm	底部に枿を設ける。墓壇 面は平滑に仕付けられる が、表面は未加工、厚さ20 cm		備考
1893	1875	1876	1868	1866	1851	西暦	
本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	本法寺墓地	所在	

第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	第20回	押印番号
W15	W47	W13	KG46	W14	W21	W44	W48	W24		整理番号
108	107	106	105	104	103	102	101	100		報告番号
一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔		種別
(47.5)	49.5	67.0	75.5	(61.5)	(63.5)	(61.0)	(63.5)	76.0		全高
18.5	16.0	19.0	23.0	24.0	(27.0)	25.5	25.0	19.0		最大幅
			抄 三月十日 慶長三年				〇〇同祀 十二月廿一日			銘文
が1・19	空風輪は欠損する、地輪は幅に対する高さの比率が1・00	地輪は幅に対する高さの比率が1・03	地輪は幅に対する高さの比率が1・05	相輪部は欠損する、基礎は幅に対する高さの比率が1・12	相輪部は欠損する、基礎は幅に対する高さの比率が0・98	相輪部は欠損する、軒高が10・5cmと高い、基礎は幅に対する高さの比率が1・30	相輪部は欠損する、塔身に地蔵尊像の種子を印刷した日輪を施す、基礎は幅に対する高さの比率が1・09	相輪基部に伏鉢を表現する、基礎は幅に対する高さの比率が1・16	相輪伏鉢部に講花を施す、基礎は幅に対する高さの比率が1・16	備考
			1598				1607			西暦
南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	所在

第20回	第21回	第21回	第21回	第20回	第20回	第20回	第20回	押印番号
W52	W51	W50	W45	W46	W16	W20	W20	整理番号
115	114	113	112	111	110	109	109	報告番号
宝篋印塔	組合せ 宝篋印塔	組合せ 宝篋印塔	組合せ 宝篋印塔	光背形 基壇	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	種別
(63.0)	(39.0)	56.5	(30.5)	(28.5)	(36.5)	(48.5)		全高
(26.5)	23.0	18.5	24.0	13.5	14.0	20.5		最大幅
キリク 〇〇准十位 寛二月廿七日			キリク □□如 □□ □□					銘文
1 23	相輪部は欠損する、基礎は幅に対する高さの比率が1・23	相輪上部のみ、宝珠下半に講花を施す。	相輪部のみ、伏鉢上縁に交帯を設け、宝珠下半に講花を施す。	下半部は欠損する、厚さは約7cmで背面中央部はやや厚り込む	空風火輪のみ。	空風輪は欠損、地輪は幅に対する高さの比率が1・30	空風輪は欠損、地輪は幅に対する高さの比率が1・00	備考
1614								西暦
南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	所在

第18回	第17回	第17回	第17回	第17回	第19回	第19回	第19回	第19回	押印番号
KG39	KG37	KG36	KG42	KG26	IW35	IW34	IW33	IW36	整理番号
90	89	88	87	86	85	84	83	82	報告番号
宝篋印塔 組合せ	光背形基壇	光背形基壇	一石宝篋印塔	宝篋印塔 組合せ	地蔵	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	種別
42.0	(33.0)	(35.0)	(74.5)	61.0	52.0	(19.5)	(33.0)	(29.0)	全高
18.5	(27.5)	(31.5)	(24.0)	17.0	27.0	14.0	12.0	(15.0)	最大幅
					不明				銘文
	相輪部のみ、伏鉢上端に 変形が設けられ、九輪下 部と宝珠下部に請花が施 される。	1号石座の裏壁面に彫壇 状に加工された平出座の 中央に、2基並列して設 置される。両者ともに輪 と基部のみ残存してい る。	宝珠は欠損する。伏鉢に 請花が施される。	製 相輪部のみ、オオハタ石	像 舟形光背を備えた地蔵立	1・39 地輪のみ残存。地輪の輪 に対する高さの比率が	空座輪は欠損。地輪の幅 に対する高さの比率が 1・13	花が施される。伏鉢に請 77と同一個体。	備考
2号石座	1号石座	1号石座	1号石座	1号石座	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西暦 所在

第20回	第21回	第21回	第21回	第21回	第21回	第21回	第21回	第18回	押印番号
IW11	IW39	IW38	IW41	IW40	IW23	IW22	IW42.43.49	KG40	整理番号
99	98	97	96	95	94	93	92	91	報告番号
一石宝篋印塔	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	一石宝篋印塔	種別
89.5	26.5	21.5	24.0	51.5	80.0			(44.5)	全高
26.0	27.0	28.0	(39.0)	17.0	26.5	(47.0)	(48.0)	(18.0)	最大幅
	慶長十九年 性宗○信士 寛八月廿四日	口口口妻子 心月○禪定門 隆二月十日 敬白					(キヤ)カ(バ)ア		銘文
相輪伏鉢部に請花を施 す。基礎は輪に対する高 さの比率が1・25	基礎部のみ、上面縁辺の 礎花は硬化した表現。基 礎は輪に対する高さの比 率が0・98	基礎部のみ、上面縁辺の 礎花は硬化した表現。基 礎は輪に対する高さの比 率が0・77	空部のみ、軒下に請花を 施す。	相輪部のみ、伏鉢上端に 変形を設け、宝珠下部に 請花を施す。	相輪部のみ、伏鉢上端に 変形を設け、九輪下部と 宝珠下部に請花を施す。	相輪部のみ、伏鉢上端に 変形を設け、九輪下部と 宝珠下部に請花を施す。 並列立地する大型塔。	塔身・基礎は欠損。93と 並列立地する大型塔。	塔身は欠損。遺元総高は 190cm前後	備考
1614									西暦
南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	南斜面	2号石座	所在

第15図	第15図	第15図	第15図	第15図	第15図	第15図	第16図	第15図	押図番号
W55	W1	W2	KG41	W19	KG45	W6	W3	W17	整理番号
117	72	71	70	69	68	67	66	65	報告番号
一石宝篋印塔	台石	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	一石宝篋印塔	種別
(60.5)	(15.0)	44.0	(50.0)	(57.5)	30.5	66.0		(41.0)	全高
26.0	44.0	12.0	22.0	(28.0)	31.0	19.5	38.0	(29.0)	最大幅
		寛文三年 三月廿八日 妙○重女 當位			寛永十天 八月十日 観○信女				銘文
九輪は欠損するが、伏鉢部の表現が現れる。基礎部の幅に対する高さの比率が1・02	か、他材と組合わせて使用	地輪の幅に対する高さの比率が1・04	1・2	相輪部は欠損、基礎部の幅に対する高さの比率が1	相輪部は欠損、基礎部の幅に対する高さの比率が1	基礎のみ、幅に対する高さの比率が0・98	相輪部のみ、伏鉢上端に交帯を設け、九輪下部と宝珠下部に蓮花を施す。	土中に埋まるため基礎部は不明、九輪部は欠損する。	備考
		1663			1633				西暦
北斜面	西斜面	西斜面	西斜面	西斜面	西斜面	西斜面	西斜面	西斜面	所在

第19図	第19図	第19図	第19図	第19図	第19図	第19図	第19図	第19図	押図番号
W37	W29	W28	W32	W26	W27	W30	W31	W25	整理番号
81	80	79	78	77	76	75	74	73	報告番号
一石宝篋印塔	石段	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	宝篋印塔 組合せ	種別
(60.0)	14.0	(54.5)	(26.0)	(45.0)	(59.5)	(74.0)	95.0	(18.5)	全高
28.0	(44.0)	21.0	12.5	26.0	(26.0)	26.0	26.0	36.0	最大幅
キリシタ 〔元和元初年〕		キリシタ 慶長二年 六月十九日 ○妙尼				キリシタ 正保□□□ 寛文□□□□ 十月□□□□	キリシタ 慶○年 □□□妙位 □□廿一日		銘文
相輪基部に伏鉢は表現されず蓮花が施される。基礎部の幅に対する高さの比率が1・24	相輪基部に伏鉢は表現されず蓮花が施される。基礎部の幅に対する高さの比率が1・24	空風輪は欠損、地輪の幅に対する高さの比率が1・17	空風輪は欠損、地輪の幅に対する高さの比率が0・92	空風輪は欠損、基礎部の幅に対する高さの比率が1・14	相輪基部に伏鉢は表現されず蓮花が施される。基礎部の幅に対する高さの比率が1・14	相輪基部に伏鉢は表現されず蓮花が施される。基礎部の幅に対する高さの比率が1・21	相輪基部に伏鉢は表現されず蓮花が施される。基礎部の幅に対する高さの比率が1・31	笠部のみ、軒下は欠損する。	備考
1615		1597				1644~1648	1596~1615		西暦
西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	西斜面下段	所在







第12回	第10回	第10回	第10回	第10回	第10回	第10回	第9回	第9回	押戻番号
KG7	KG16	KG15	KG14	KG9	KG10	KG8	KG3	KG1	整理番号
20	19	18	17	16	15	14	13	12	報告番号
宝篋印塔 組合せ	台座	台座	台座	台座	台座	台座	石殿	石殿	種別
77.0	11.0	7.0	14.0	14.0	13.5	13.5	15.0	15.0	全高
22.0	(61.0)	(50.0)	62.5	62.0	62.5	63.0	54×54	80×84	最大幅
									銘文
相輪部のみ、伏鉢上部に 宝帯を設け、九輪下半と 宝珠下半に蓮花を施す。	上面外側7cmほどは平滑 に仕上げられる。	上面外側7cmほどは平滑 に仕上げられる。	16とセット。	17とセット。上面外側6 〜7cmは平滑に加工され る。	14とセット。	15とセット。上面外側5 〜7cmは平滑に加工され る。	底部のみ。側面と後面の 壁材を積み込むための深 さ5cm程度の溝を設け る。溝の内法は、30cm四 方程度となる。	底部のみ。側面と後面の 壁材を積み込むための深 さ6cm程度の溝を設け る。溝の内法は、48×55 cmとなる。	備考
東尾根	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	西暦 所在

第12回	第12回	第12回	第12回	第12回	第12回	第12回	第12回	第12回	押戻番号
KG9	KG21	KG26	KG22	KG24	KG30	KG27	KG29	KG33	整理番号
29	28	27	26	25	24	23	22	21	報告番号
宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	宝篋印塔 組合せ	種別
(17.5)	(24.0)	(13.0)	21.5	(17.5)	23.0	55.0	54.5	(65.5)	全高
35.0	(35.0)	40.0	37.0	31.0	30.0	17.0	17.0	19.0	最大幅
									銘文
立部のみ、軒下は欠損す る。	立部のみ、軒下に蓮花を 施す。上下からの内割が 貫通している。	立部のみ、軒は欠落して いる。	立部のみ、軒下に蓮花を 施す。上下からの内割が 深い。	立部のみ、軒下は欠落し ている。	立部のみ、軒下が3・5 cmと狭い。軒下に蓮花を 施す。	立部のみだが、九輪は 大半が欠損。宝珠下半に 蓮花を施す。	相輪部のみ、伏鉢上部に 宝帯を設け、宝珠下半に 蓮花を施す。	相輪部のみ、伏鉢上部に 宝帯を設け、九輪下半と 宝珠下半に蓮花を施す。	備考
東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	東尾根	西暦 所在

第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	第8図	神図番号
KG13	KD2	KG2	KG5	KG4	KD1	W10	KG12	KG6,7,11			整理番号
11	10	9	8	7	6	5	4	1-2-3			報告番号
僧籠	僧籠	僧籠	地蔵	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	組合宝篋印塔	組合宝篋印塔			種別
15.5	27.0	(48.0)	(29.0)	(75.0)	69.0	(19.0)	5.0				全高
29.0	65.0	(24.0)	25.0	20.5	21.0	(12.0)	(45×47.5)	47.0			最大幅
	①願主 松原常右衛門 長谷善惣治 松原衛太郎 同名市松 ②石工福光村 坪内忠兵衛 同名甚七郎		甚光大権現		慶長八年 妙〇禪定尼 四月九日			遺身の各面に「ワリン」 「ラーク」 「アエ」 「キリク」 の金剛界五位の種子が施され る。			銘文
上面中央の30cm余四方は 整備を殊すがその周囲は 平滑に仕上げる	上面には鞍部に填め込む ための凹字状の削り込み が施される。	上端には鞍部を受ける高 さ3cm 幅10cmの枠を設 ける。底部は13cm余り削 り込む。	頸部は欠損する。	地輪底面は15cm程削り込 まれる。	地輪底面は7cm程削り込 まれる。火輪に「キリ ク」を刻む。	伏鉢、宝篋部分は欠損	台座のみ、一石を組合わ せて、底花付台座とする もの。34cm角の基礎が乗 るものと推定される。	62・5cm	粗輪。基礎部分は欠損す る。現存部材の総高は		備考
											西暦
尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部	尾根頂部		所在

## 凡例

- ・石見銀山遺跡に所在する石造物の観察表である。
- ・各石造物の規模は、基本的に全高及び最大幅をcm単位で掲載した。欠損している場合は、残存している規模を残存高または各部材ごとの高さで ( ) をつけて掲載した。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は、□ で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は、) (上欠)、( (下欠) と示した。また、推定できる文字は□内に入れて表示した。  
戒名及び名字は〇〇〇とした。
- ・石造物の実測台帳は保管している。
- ・写真図版及び神図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

## 報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	栃畑谷地区 字甚光院墓地の石造物調査		
巻次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	14		
編執筆者	岩橋孝典		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2014年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
名称	所在地	主な時代	石造物
栃畑谷地区字甚光院墓地	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代後期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、光背形墓標、石殿、地藏
大谷地区高橋家裏墓地	大田市大森町	江戸時代前期	無縫塔、組合せ宝篋印塔
清水谷地区本法寺跡門脇家墓所	大田市大森町	江戸時代中期 ～後期	円頂六角形墓標、円頂方柱墓標、円頂方形墓標、自然石墓標
下河原天満宮跡	大田市大森町	江戸時代中期 ～後期	燈籠、鳥居

## 石見銀山遺跡石造物調査報告書14

— 大谷地区 字甚光院の石造物調査 —

平成26(2014)年3月

---

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会  
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会  
松江市殿町1番地

URL [http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/  
iwami\\_ginzan/](http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/)

印 刷 有限会社 松陽印刷所

---